福島県文化財調査報告書第514集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告５

福 田 遺 跡
沼 ヶ 入 遺 跡（１次調査）
上 ノ 台 遺 跡

２０１６年

福 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人 福 島 県 文 化 振 興 財 団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告５

福田（ふくだ）遺跡
沼ケ入（ぬまがいり）遺跡（１次調査）
上ノ台（かみのだい）遺跡

序　　文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めております。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格幹線道路(自動車専用道路)であり、東日本大震災から被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられています。震災前に国道115号バイパスとして整備されていた霊山道路と阿武隈東道路を含む福島市から相馬市までの全線が、緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、周知の埋蔵文化財や新たに発見された埋蔵文化財包蔵地が数多く確認されており、先人が残した貴重な文化遺産が所在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成19年度以降、埋蔵文化財の範囲や性格を確かめるための分布調査を行い、その結果をもとに平成25年度から現状保存の困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山道路、霊山～福島)の建設に伴い、平成27年度に行った伊達市霊山町下小国地区に所在する福田遺跡、沼ヶ入遺跡、上ノ台遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。この報告書を県民の皆様が文化財に対する理解を深め、地域を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力・御尽力いただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表します。

平成28年10月

福島県教育委員会

教育長　　鈴　木　淳　一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山道路、霊山～福島)の建設に伴い、平成27年度に発掘調査を行った伊達市霊山町下小国地区に所在する福田遺跡、沼ヶ入遺跡、上ノ台遺跡の調査成果をまとめたものです。

福田遺跡と沼ヶ入遺跡では中世の武士階級の居住の場が発見され、とくに沼ヶ入遺跡では、陰陽道の鬼門の方角(北東)に中国渡来銭と青磁碗を埋納した掘立柱建物跡の地鎮の痕跡が確認できました。また、上ノ台遺跡では縄文時代の遺物包含層が検出され、当時の人々の暮らしぶりを考える上で貴重な成果となりました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査にご協力いただきました国土交通省東北整備局福島河川国道事務所、伊達市ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年10月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　杉　　昭　重

緒　　言

1　本書は、平成27年度に実施した一般国道115号相馬福島道路(霊山道路、霊山～福島)遺跡発掘調査の報告書である。

2　本書には、以下に記す遺跡調査成果を収録した。

福田遺跡	福島県伊達市霊山町下小国字福田・桜町	埋蔵文化財番号　0721300655
沼ヶ入遺跡	福島県伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡	埋蔵文化財番号　0721300656
上ノ台遺跡	福島県伊達市霊山町下小国字玉田	埋蔵文化財番号　0721300659

3　本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。

4　福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5　公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査　　菅原　祥夫
文 化 財 主 査　　菊田　順幸

さらに、調査期間中は臨時的に下記の職員の協力を得た。

文 化 財 主 査　　廣川　紀子
文 化 財 主 事　　由井　文菜

6　本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

7　本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

8　発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から協力・助言をいただいた。

伊達市教育委員会　　室野　秀文　　菅野　崇之

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

⑴　方　　位　　図中の方位は座標北を示す。方位記号の無いものは、図の真上を座標北とする。

⑵　縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

⑶　ケ　　バ　　遺構内の傾斜部は「卌」の記号で表現した。

⑷　土　　層　　遺構外堆積土は大文字のＬとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。

（例）遺構外堆積土…ＬⅠ・ＬⅡ　　遺構内堆積土…ℓ１・ℓ２

⑸　標　　高　　挿図中に示した標高は、海抜高度を示す。

⑹　遺構番号　　当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。

⑺　土　　色　　土層注記に使用した土色は、『新版標準土色帖22版』（小山正忠・竹原秀雄1999）に基づいている。

2　本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

⑴　縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

⑵　遺物番号　　挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。

（例）図１の２番の遺物…図１－２

遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。

（例）１－２…図１－２

⑶　遺物計測値　（　）内の数値は推定値、［　］内の数値は遺存値を示す。

3　本書で使用した略号は、次のとおりである。

伊達市…ＤＴ	福田遺跡…ＦＫＤ	沼ヶ入遺跡…ＮＧＩ	上ノ台遺跡…ＫＮＤ
掘立柱建物跡…ＳＢ	木炭窯跡…ＳＣ	土坑…ＳＫ	溝跡…ＳＤ
遺物包含層…ＳＨ	柱穴・小穴…Ｐ	遺構外堆積土…Ｌ	遺構内堆積土…ℓ

4　引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、各編末に収めた。

目　　次

序　章　遺跡の環境と調査経緯

第１節　調　査　経　過……1
第２節　地 理 的 環 境……3
第３節　歴 史 的 環 境……5
第４節　調　査　方　法……7

第１編　福 田 遺 跡

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……11
第２節　調　査　経　過……11

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層……13
　調査成果の概要(13)　　基本土層(13)
第２節　土　　坑……13
　１号土坑(15)　　２号土坑(15)　　３号土坑(15)　　４号土坑(17)
第３節　溝　　跡……17
　１号溝跡(17)　　２号溝跡(17)
第４節　小　穴　群……19

第３章　総　　括……20

第２編　沼ヶ入遺跡（１次調査）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……23
第２節　調　査　経　過……23

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層……25
　調査成果の概要(25)　　基本土層(25)
第２節　掘 立 柱 建 物 跡……27
　１号掘立柱建物跡(27)　　２号掘立柱建物跡(29)
第３節　土　　坑……31
　１号土坑(31)　　２号土坑(31)　　３号土坑(31)　　４号土坑(33)　　５号土坑(33)
　６号土坑(33)　　７号土坑(35)　　８号土坑(35)　　９号土坑(35)

第３章　総　　括

第１節　沼ヶ入遺跡の１次調査でわかったこと……36
第２節　周辺遺跡との関連……38

第３編　上 ノ 台 遺 跡

第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況……43
第２節　調　査　経　過……43

第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層……45
調査成果の概要(45)　基本土層(45)
第２節　木　炭　窯　跡……46
１号木炭窯跡(46)
第３節　遺 物 包 含 層……47
概　　要(47)　遺　　物(47)

第３章　総　　括 ……50

挿図・表・写真目次

序　章　遺跡の環境と調査経過

［挿図］
図１　一般国道115号相馬福島道路位置図 …… 1
図２　道路工事計画図…… 2
図３　遺跡周辺地形分類図…… 4
図４　周辺の主な遺跡位置図…… 6

［ 表 ］
表１　周辺の遺跡一覧…… 7

第１編　福 田 遺 跡

［挿図］
図１　調査区位置図……12
図２　遺構配置図、基本土層……14
図３　１～４号土坑……16
図４　１・２号溝跡、２号溝跡出土遺物……18
図５　小穴群……19

［写真］
１　調査区遠景……53
２　調査区全景……53
３　１～４号土坑……54
４　１・２号溝跡全景……55
５　１・２号溝跡全景……55
６　作業風景……56
７　調査状況と出土遺物……56

第２編　沼ヶ入遺跡（１次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……24
図２　遺構配置図、基本土層……26
図３　１号掘立柱建物跡、出土遺物……28
図４　２号掘立柱建物跡……30
図５　１～４号土坑、出土遺物……32
図６　５～９号土坑、出土遺物……34
図７　遺跡の位置関係……36
図８　関連遺跡の分布……37
図９　平場と建物配置……38
図10　狭梁掘立柱建物跡の集成　……39
図11　地鎮……40

［写真］

１　調査区遠景……59
２　調査区遠景……59
３　調査区遠景……60
４　調査区全景……60
５　１号掘立柱建物跡全景……61
６　１号掘立柱建物跡全景……61
７　１号掘立柱建物跡柱穴……62
８　２号掘立柱建物跡全景……63
９　２号掘立柱建物跡柱穴……63
10　１号土坑検出状況……64
11　１号土坑全景……64
12　１号土坑全景……65
13　１号土坑断面……65
14　２～５号土坑……66
15　６～９号土坑……67
16　作業風景……68
17　調査状況と出土遺物……68

第３編　上 ノ 台 遺 跡

［挿図］

図１　調査区位置図……44
図２　基本土層……45
図３　遺構配置図……46
図４　１号木炭窯跡……47
図５　１号遺物包含層出土遺物（１）……48
図６　１号遺物包含層出土遺物（２）……49

［写真］

１　調査前状況……71
２　調査区全景……71
３　１号木炭窯跡検出状況……72
４　１号木炭窯跡全景……72
５　１号木炭窯跡細部……73
６　１号木炭窯跡断割……73
７　１号遺物包含層……74
８　１号遺物包含層出土遺物……74

序　章　遺跡の環境と調査経緯

第１節　調 査 経 過

一般国道115号相馬福島道路（図１・２）は、常磐自動車道と東北自動車道を結ぶ約45㎞の高規格道路であり、東日本大震災からの早期復興を図るリーディングプロジェクトとして、国土交通省東北地方整備局により、緊急整備されている。全５区間のうち、相馬西道路と阿武隈東道路の２区間は国土交通省東北地方整備局磐城国土国道事務所が、阿武隈東～阿武隈と霊山道路と霊山～福島の３区間は同省同局福島河川国道事務所が事業を進めている。

その建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、震災前の平成19年度から公益財団法人（平成24年10月以前は財団法人）福島県文化振興財団遺跡調査部が実施している。平成27年度は伊達市霊山町下小国地区に所在する以下の３遺跡の発掘調査を実施した。

◎霊山道路……福田遺跡・沼ヶ入遺跡

◎霊山～福島…上ノ台遺跡

公益財団福島県文化振興財団では、平成27年４月１日付の福島県教育委員会との委託契約を受けて、遺跡調査部の職員２名を配置して実施した。年度当初に確定していた調査遺跡と面積は、前年度の試掘調査で確認した福田遺跡1,100㎡と沼ヶ入遺跡1,300㎡のみである。したがって、以後の展開は、平成27年度の試掘調査で要保存面積が確定次第、順次追加していくこととなった。ただ、この段階で問題となったのは、同じ一般国道115号相馬福島道路関連事業の内、磐城国道事務所が進める塩手山トンネル掘削工事とからみ、相馬西道路の横川Ｂ遺跡の調査がきわめて高い緊急性が生じたことであった。そこで、福島県教育委員会が福島河川国道事務所、磐城国道事務所の双方と

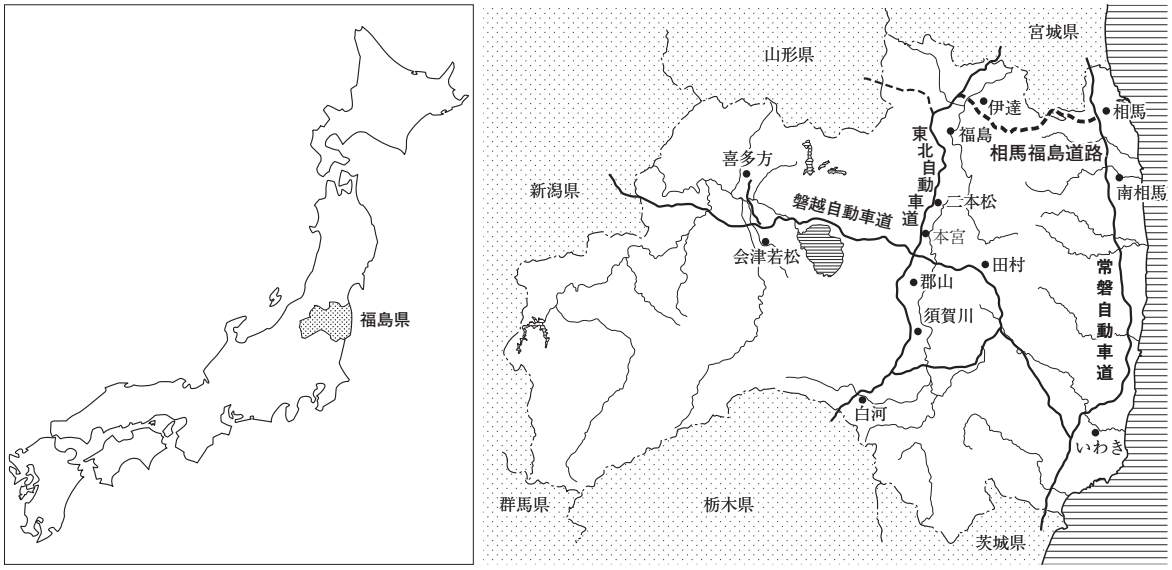


図１　一般国道115号相馬福島道路位置図

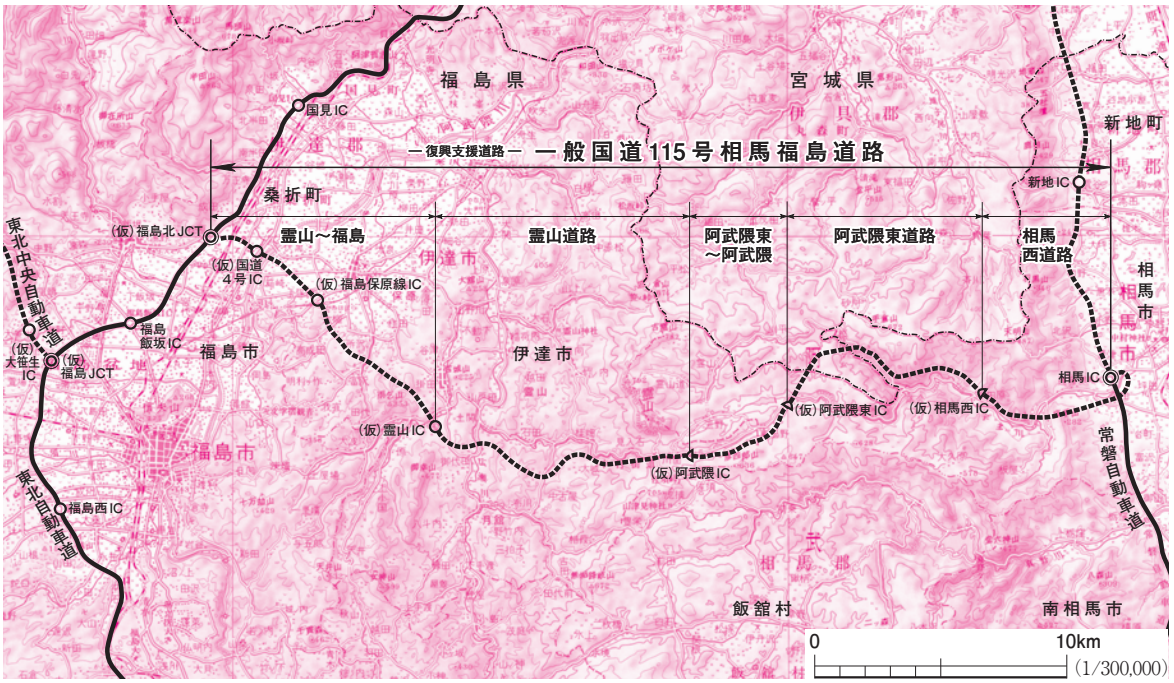


図２　道路工事計画図

調整した結果、６月までに東羽黒平遺跡（３次調査）を加えた相馬西道路の調査を終了させたのち、７月から霊山道路および霊山～福島の調査に移行することとなった。併せて、４月に行う福田・沼ヶ入遺跡に隣接するＤＴ－Ｂ22の試掘調査で要保存面積が生じた場合はそれを最優先し、生じない場合は①福田遺跡1,100㎡、②沼ヶ入遺跡1,300㎡の順番で調査することとなった。

５月21日の連絡調整会議において、ＤＴ－Ｂ22の試掘調査の結果、要保存面積が生じなかったことが、文化財側から報告された。これを受け、６月末から福田遺跡の調査を開始することが決定した。併せて、福田遺跡の北方の上ノ台館跡において、測量調査の結果、要保存面積11,000㎡が確定し、要保存範囲は未試掘範囲にかなり広がる見込みであることが報告された。

さらに、６月18日の連絡調整会議では、文化財側より福田遺跡の調査が軌道に乗った段階で、沼ヶ入遺跡の調査にも着手し、両遺跡とも９月末までに調査を終了する予定が示された。また、上ノ台館跡に関しては、試掘調査による要保存面積確定後、その一部の調査に着手するには、工事側による伐採および伐木搬出などの条件整備が必要であることも要望された。

以上の経過を経て、６月29日から福田遺跡の調査を開始した。排土運搬路の鉄板敷設とプレハブ・トイレの設置の後、７月２日から重機による表土剥ぎを実施したところ、遺構の分布状況が見え始め、７月13日には人力による遺構検出を開始した。ところが、その後は記録的猛暑と降雨の日が交互に続き、作業員の出勤率が著しく低下してしまった。そのため、７月27日から表土剥ぎに着手した沼ヶ入遺跡については、表土剥ぎ終了後に、上面をシートで養生して作業をいったん中断することとした。

また、試掘調査の進展によって10月以降の予定にも変更が生じた。上ノ台館跡の北縁にかかる区域に要保存範囲900㎡が生じたことから、10月以降の調査対象はこの要保存区域（上ノ台遺跡）と

し、上ノ台館跡は縄張り図を作成することとなった。以降、この最終方針に沿って作業を進めていくこととなった。

８月中旬以降は涼しくなったが、雨模様の日は続き、それでも、調査は沼ヶ入遺跡の調査へ徐々に移行していった。８月28日には、福田遺跡の実質的な調査を終了させることができ、中世特有の方形竪穴状遺構、ロクロかわらけが発見され、一定の成果を得た。

９月からは、沼ヶ入遺跡の調査に人員を集約させた。天気は相変わらず不順で、19日夜には伊達市内に甚大な豪雨被害があったものの、幸い調査自体に大きな影響は無かった。中国渡来銭と中国龍泉窯産青磁碗を埋納した掘立柱建物跡の地鎮跡が発見されるなどの成果もあり、９月30日に調査を終了し、10月５日に福田遺跡と一括で工事側へ引き渡しを行った。調査の結果、隣接する福田遺跡と沼ヶ入遺跡は、中世の一体的な遺跡であることが判明した。

上ノ台遺跡の調査は、福田・沼ヶ入遺跡の引き渡し後、工事側による伐採作業と駐車場造成の条件整備終了を待って、10月13日から開始した。調査区は高低差が激しい谷地形のため、作業員の労働災害防止にはかなり気を配らなければならなかったが、天候が安定し、調査は順調に推移した。遺構は縄文時代の遺物包含層１ヵ所と中世以降の木炭窯跡１基であった。11月25日には実質的な作業を終了させ、26日に現地を工事側に引き渡し、本年度の発掘調査の一切を完了した。

なお、上ノ台館跡については次年度以降の発掘調査の参考とするため、縄張り図作成を11月25・26日に実施した。成果品は、次年度以降の調査報告書に収録の予定である。　（菅　原）

第２節　地 理 的 環 境

福島県は東北地方の南東端に位置し、東側は太平洋に面している。面積は13,782㎢で、北海道、岩手県に次ぐ全国３番目の面積を有する。県土の約８割を山地が占め、南北に並行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地によって３地方に分割され、西から順に会津地方、中通り地方、浜通り地方と呼称されている。

伊達市霊山町は中通り地方の北東部に位置し、大半が阿武隈高地の山中にある。地形は標高825ｍの霊山山塊を最高峰に、標高200～500ｍクラスの山々が連なっており、その谷間には東北第２位の大河川である阿武隈川に合流する広瀬川と、その支流（大石川、祓川、石田川、小国川など）が開析した狭い平坦地が形成されている。気候は夏が暑く、冬は降雪量が少ないものの寒冷で、年間平均気温は12℃、年間降水量は約110㎜である。こうした土地柄を利用して、近世～近代には養蚕業・絹織物業、葉タバコ生産が盛んに行われ、1970～1980年代以降は、牧畜・段々畑・果樹栽培地への転換がなされてきた。

調査対象の３遺跡が所在する下小国地区は、標高532ｍの天井山北西麓から流れ出る小国川流域で、福島市と相馬市を結ぶ国道115号線（中村街道）に面し、隣接の掛田地区は国道115号線と国道349号線が南北に交差する交通の要衝地である。この地理的特性は、周囲の歴史的環境を考えるう

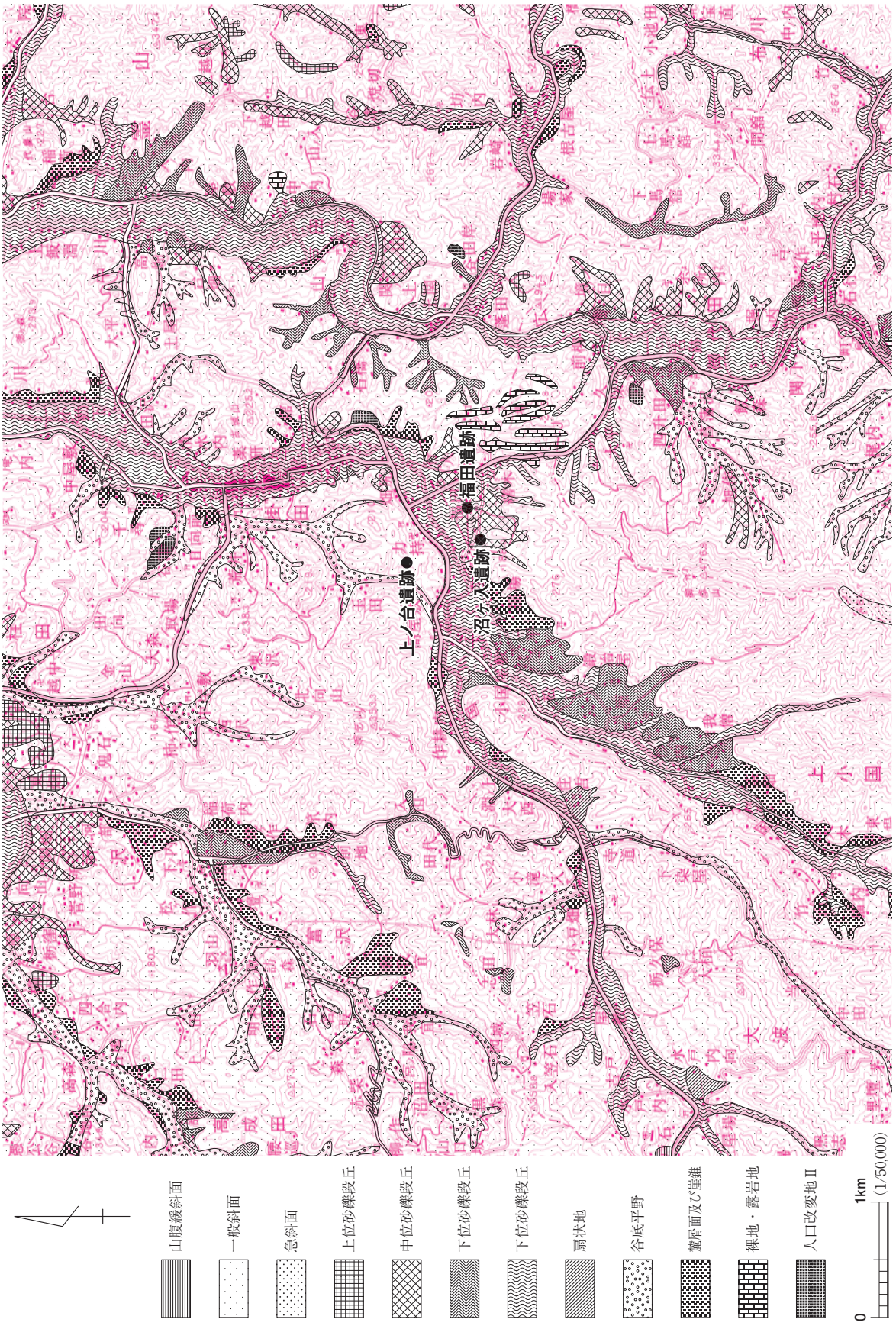


図３　遺跡周辺地形分類図

えで、重要と思われる。

次に、地質を概観する。下小国地区を含む霊山山塊の南側～西側は、風化が著しい雲母系花崗岩類を基盤層として、新第三紀の火山砕屑堆積物(霊山層、月舘層など)が広く覆う。そして、高地・丘陵地間の谷部には、第四紀の未固結堆積物(岩石化していない礫・砂・泥など)が堆積し、斜面部などには、西方の吾妻・安達太良火山群からもたらされた更新世後半期の火山灰や風成二次堆積物(火山灰を母材とする黄褐色土壌)層が散在するところもある。　（菅　原）

第3節　歴 史 的 環 境

伊達市霊山町域では、各時代の遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。(表１)

旧石器時代　万田川遺跡(52)から、石刃と剥片が出土している。いずれも細石刃の出現以前のものとみられている。

縄文時代　縄文時代は、早期～前期の明確な集落跡がまだ発見されていない。現状では、早期後半の土器が霊山山頂から、前期前葉の土器が川向遺跡(８)から少量出土しているのみである。しかし、中期～後期では、橋本遺跡(20)、倉波入遺跡(23)、松ヶ倉遺跡(24)、古谷地遺跡(32)篭ノ内遺跡(33)、久保田遺跡(36)、武ノ内遺跡(41)などの集落跡が確認された。とりわけ、武ノ内遺跡では中期末葉～後期の竪穴住居跡13軒、配石遺構14基、屋外埋設土器74基、土坑113基が発見されており、松ヶ倉遺跡でも縄文時代中期末葉～後期中葉の埋甕３基、土坑５基が検出されている。続く晩期はさらに遺跡数が増加する反面、遺跡の規模は小さくなっていく。川向遺跡(８)、熊屋敷Ｂ遺跡(10)、熊屋敷遺跡(11)、千石平遺跡(16)、岩平Ｂ遺跡(17)、家ノ入遺跡(18)、小坂遺跡(19)、漆宝遺跡(21)、大石台遺跡(25)、根古屋遺跡(27)、三斗蒔遺跡(38)、武ノ内遺跡(41)などが知られ、根古屋遺跡では、晩期終末の完形土器が多数出土している。

弥生時代　弥生時代になると、集落様相は不明になる。しかし、根古屋遺跡(27)と武ノ内遺跡(41)では再葬墓が認められ、縄文時代晩期と地点をずらして集落が継続したのは間違いない。根古屋遺跡で発見された弥生時代前期後半～中期前半の土器棺墓25基、土坑墓２基、土坑４基、人骨集積地２箇所、土器棺150個体は、東日本の代表的な再葬墓資料の１つと評価されている。

古墳時代　行合道Ｂ遺跡(９)から、単体で中期後葉～後期前葉の土師器甕が出土している。集落跡は発見されていない。

古代・中世　この時代を代表するのは、急峻な霊山山塊に営まれた霊山寺跡とその関連遺跡群(12～15)である。貞観元(859)年に、慈覚大師円仁が開基したと伝えられ(「霊山寺縁起」)、南北朝期の建武四(1337)年に、北畠顕家が一時仙台平野から陸奥国府を移した当該遺跡群では、礎石建物群、溝跡、道路跡などの遺構とともに、土師器杯、須恵器甕、龍泉窯青磁花盆・皿、中世瓦、鉄製錫杖などの多種多様な遺物が発見されている。また、15世紀前半に創建された国指定史跡宮脇廃

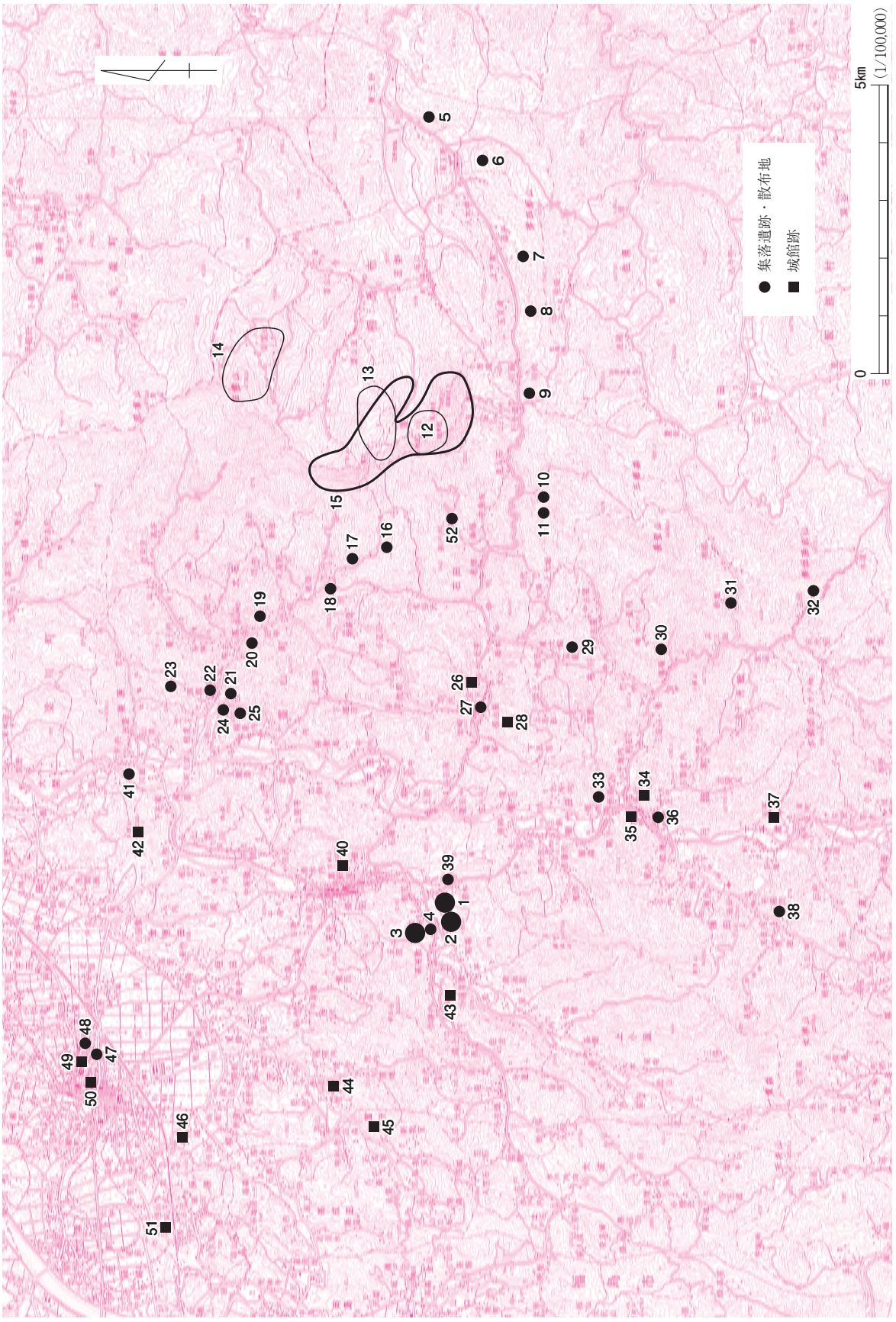


図４　周辺の主な遺跡位置図

表１　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種　別	時　期	No.	遺跡名	所在地	種　別	時　期
1	**福田遺跡**	伊達市霊山町下小国	集落／城館跡	中世	27	根古屋遺跡	伊達市霊山町石田	集落跡	縄(後･晩)、弥
2	**沼ヶ入遺跡**	伊達市霊山町下小国	集落／城館跡	中世	28	小館跡	伊達市霊山町石田	城館跡	中世
3	**上ノ台遺跡**	伊達市霊山町下小国	木炭窯､遺物包含層	縄文､中世以降	29	宝直館跡	伊達市月舘町布川	塚など	縄文､中～近世
4	上ノ台館跡	伊達市霊山町下小国	城館跡	中世	30	堰場遺跡	伊達市月舘町布川	製鉄関連	中世～近世
5	姥ヶ岩遺跡	相馬市東玉野	木炭窯	近世初	31	砂場遺跡	伊達市月舘町布川	製鉄関連	中世～近世
6	向山遺跡	相馬市東玉野	集落跡	縄文(早・前)	32	古谷地遺跡	伊達市月舘町月舘	散布地	縄文(前・中)
7	庚申向Ａ遺跡	伊達市霊山町石田	木炭窯	縄文、近世	33	蔓ノ内遺跡	伊達市月舘町布川	集落跡	縄文(中)
8	川向遺跡	伊達市霊山町石田	集落跡	縄文(後・晩)	34	月見館跡	伊達市月舘町月舘	城館跡	中世
9	行合道Ｂ遺跡	伊達市霊山町石田	木炭窯	平安、中世末	35	殿上館跡	伊達市月舘町月舘	城館跡	中世
10	熊屋敷Ｂ遺跡	伊達市霊山町石田	集落跡･木炭窯	縄文(後･晩)･中世	36	久保田遺跡	伊達市月舘町月舘	散布地	縄文(中・後)
11	熊屋敷遺跡	伊達市霊山町石田	散布地	縄文(後・晩)	37	下手渡藩陣屋跡	伊達市月舘町下手渡	陣屋跡	近世後期
12	霊山寺山頂伽藍群	伊達市霊山町石田	寺院跡	古代～中世	38	三斗蒔遺跡	伊達市月舘町糠田	散布地	縄文(早～晩)
13	霊山寺玉野川上流伽藍群	伊達市霊山町石田	寺院跡	古代～中世	39	行人田塚	伊達市霊山町下小国	経塚、塚	中世～近世
14	霊山寺古霊山伽藍群	伊達市霊山町石田	寺院跡	古代～中世	40	懸田城跡	伊達市霊山町掛田	城館跡	中世
15	霊山城跡	伊達市霊山町石田	城跡	中世(南北朝期)	41	武ノ内遺跡	伊達市霊山町泉原	集落跡	縄(中･後)、弥
16	千石平遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	42	山野川大館	伊達市霊山町山野川	城館跡	中世
17	岩平Ｂ遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	43	小国城跡	伊達市霊山町下小国	城館跡	中世
18	家ノ入遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	44	根子屋館跡	伊達市保原町所沢	城館跡	中世
19	小坂遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	45	富沢城跡	伊達市保原町富沢	城館跡	中世
20	橋本遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(中・後)	46	大鳥城跡	伊達市保原町上保原	城館跡	中世
21	漆宝遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	47	大地内Ａ遺跡	伊達市保原町大泉	城館関係	中世～近世
22	宮脇廃寺跡	伊達市霊山町大石	寺院跡	中世～近世初	48	菖蒲沢Ａ遺跡	伊達市保原町大泉	集落／城館関係	古墳～近世
23	倉波入遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(中・後)	49	保原城跡	伊達市保原町城ノ内	集落／城館跡	古墳～近世
24	松ヶ倉遺跡	伊達市霊山町大石	集落跡	縄文(中・後)	50	保原陣屋跡	伊達市保原町宮下	陣屋跡	近世
25	大石台遺跡	伊達市霊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	51	高子館跡(高子岡城跡)	伊達市保原町上保原	城館跡	中世
26	大館跡	伊達市霊山町石田	城館跡	中世	52	万田川遺跡	伊達市霊山町石田	散布地	旧石器

寺跡(22)は、伊達氏が再興した霊山寺跡の可能性が指摘されており、軒瓦文様には京都の鹿苑寺や相国寺の影響が確認できる。さらに、広瀬川とその支流域に戦国期の城館跡が多いのもこの地域の特徴と言え、上ノ台館跡(４)、大館跡(26)、小館跡(28)、懸田城跡(40)、山野川大館跡(42)、小国城跡(43)がみられる。特に今回調査対象となった福田・沼ヶ入遺跡(１・２)にとって、至近距離の上ノ台館跡(４)は密接な関係を有していた可能性が考えられる。

集落跡では、行合道Ｂ遺跡(９)から９世紀末～10世紀初頭の竪穴住居跡１軒が発見され、山間部の貴重な古代の事例となっている。しかし、中世の集落跡は未発見である。この他、行合堂Ｂ遺跡(９)、熊屋敷Ｂ遺跡(10)から中世以降の木炭窯跡が発見されている。　（菊　田）

第４節　調 査 方 法

福田遺跡、沼ヶ入遺跡、上ノ台遺跡の発掘調査では、原則的に当財団で踏襲されてきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

遺跡や遺構の位置は、世界測地系に基づく国土座標Ⅸ系の座標を用いた。また、遺構や遺物の大まかな地点を示すために、10ｍ単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に１・２・３…と算用数字、西から東にＡ・Ｂ・Ｃ…とアルファベットを用い、これを組み合わせてＡ１・Ｂ２・Ｃ３…とした。

表土と盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土および遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行っている。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら進めた。具体的には、木炭窯跡と大型土坑の一部（方形竪穴状遺構）は４分割法、その他の遺構は２分割法を採用し、掘立柱建物跡の柱穴では柱痕跡と掘形の識別を行った。また、遺物包含層は、谷の長軸に直交する２本のトレンチを設定し、その土層断面と調査区南壁の土層断面の観察をもとに、遺物を層位的に取り上げた。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図作成は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用して測量し、現場で結線した。断面図については、遺跡内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構の図化に際しては、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。また、遺跡基底面の地形図は原則として1/200の縮尺で作成した。遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。

写真は35㎜判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラを使用するとともに、補助的にデジタルカメラを用い、同一被写体の撮影を行った。また、福田遺跡と沼ヶ入遺跡では、ラジコンヘリコプター搭載カメラによる空中写真撮影も行っている。

これらの調査記録および出土遺物については、報告書刊行後に当財団の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

（由　井）

参考文献

福島県教育委員会　2015 『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告３』
福島県教育委員会　2015 『福島県遺跡分布調査報告書22』
霊山町　1992 『霊山町史　第１巻通史』
福島県農地林務部農地計画課　1988 『土地分類基本調査　保原』

地形測量（上ノ台遺跡）

空撮準備（上ノ台遺跡）

第1編　福田（ふくだ）遺跡

遺跡記号	ＤＴ－ＦＫＤ
所在地	伊達市霊山町下小国字福田・桜町
時代・種類	中世の居住域、城館関連
調査期間	平成27年６月29日～８月28日
調査員	菅原祥夫・菊田順幸・廣川紀子・由井文菜

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

福田遺跡は、福島県伊達市霊山町下小国字福田・桜町に所在する。地形的には、小国川南岸の開けた河岸段丘上にあたり、市の中心部からは南東に約５㎞離れ、太平洋沿岸の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線（中村街道）のルート沿いにある。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、西側に隣接して沼ヶ入遺跡（本書第２編）、小国川対岸の真正面に上ノ台館跡が位置している。

調査開始前の現況は、西向きの起伏の少ない畑地・荒地であった。ただこれは、２回の農地基盤整備で斜面上部を削って作り出されたものである。場所によって１ｍ近くの厚い盛土が認められ、遺構検出面の状況は現地表面とかなり違っていた。（菅　原）

第２節　調 査 経 過

今回の調査範囲は、平成26年度の試掘調査の結果、要保存面積が確定した1,100㎡が対象である。調査期間は、平成27年６月29日～８月28日である。

当初は、事前準備として調査員１名が現場に入った。６月29日に生い茂った調査区の除草と排土運搬路の鉄板敷設を行い、７月２日から表土剥ぎを開始した。表土剥ぎは放射線量の計測の結果、上位３㎝を最初に除去し、その後、下位を剥ぐという２段階の工程を踏まなければならかったうえ、盛土が厚く、調査区中央のＵ字溝と暗渠を避けて行わなければならなかったが、７月上旬には遺構の分布状況が見えてきた。この結果を受け、７月13日には相馬西道路の相馬市東羽黒平遺跡の調査を終えた調査員が合流し、同日から人力による遺構検出作業を開始した。

ところが、まもなく梅雨が本格化し、梅雨明け後の７月末～８月上旬の２週間は、連日38～40℃の記録的猛暑となった。そのため、作業の進捗は著しく滞ったが、盆前までには主要な土坑、溝跡、小穴の掘り込みと記録を終えることができた。

盆明け後は打って変わって涼しくなったものの、小雨交じりの日が続いた。しかし、同時進行していた上ノ台館跡の試掘終了に伴い、作業員が増加したことで作業が軌道に乗り始めた。これにより、前年度の試掘報告（福島県教育委員会2015）で古代の竪穴住居跡と予想された遺構が、中世の方形竪穴状遺構に比定される遺構（４号土坑）であることが判明した。

こうした経過を経て、8月28日に実質的な調査が終了し、調査員及び作業員の全員は沼ヶ入遺跡の調査へ移動した。その後、９月28日に沼ヶ入遺跡と一括で空撮を行い、10月５日に工事側へ引き渡しを行った。（菅　原）

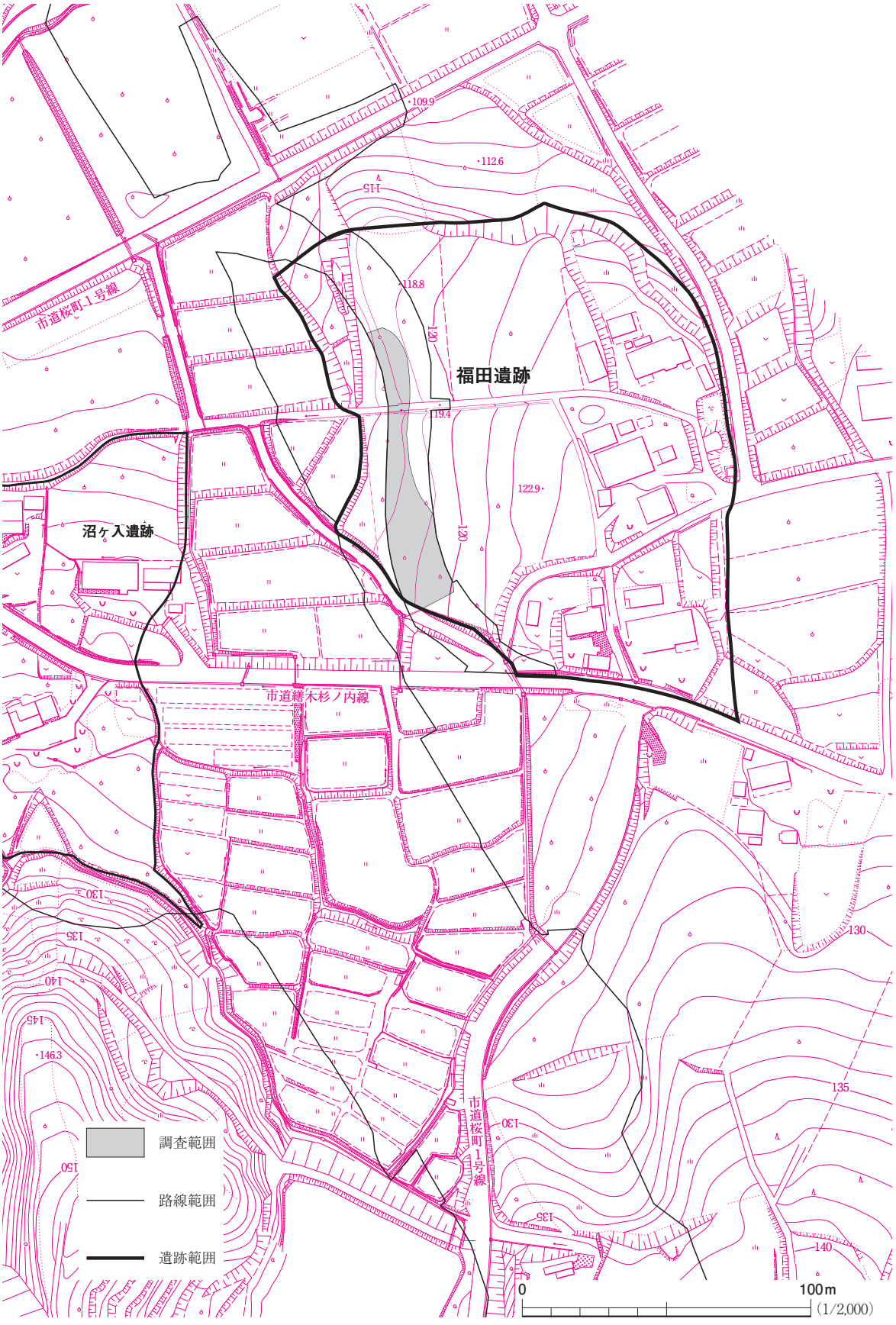

福田遺跡
沼ヶ入遺跡
市道桜町1号線
市道縫木杉ノ内線
市道桜町1号線
109.9
112.6
115
118.8
120
119.4
122.9
130
135
140
145
146.3
150
調査範囲
路線範囲
遺跡範囲
0
100m
(1/2,000)

図1　調査区位置図

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の調査区は、福田遺跡の西端付近にあたる。地形的には、南北に開析した谷に面する西向き斜面であり、中央に浅い沢が入り込み、遺構検出面の標高は116.6～118.8ｍを測る。検出された遺構は、土坑４基、溝跡２条、小穴26個を数え、北側に溝跡、南側に小穴が集中していた。

それらの時期の特定は、共伴遺物が無いため難しいが、４号土坑に関しては中世特有の方形竪穴状遺構の特徴を備えている。また、混入品ではあるが、２号溝跡の覆土から、15世紀のロクロかわらけが出土していることから、本遺跡の存続期間の一端は中世室町期に求めることができる。

基本土層

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬＩａ～Ⅵに分層している。以下、説明する（図２）。

ＬＩａ　黒褐色土（10YR2/3）である。耕作土の表土層で、層厚は10～15cmを測る。

ＬＩｂ　褐色土（10YR4/6）である。農地基盤整備に伴う盛土で、主に調査区北部に分布する。層厚は50～70cmを測る。

ＬＩｃ　灰黄褐色土（10YR4/2）である。農地基盤整備に伴う盛土で、主に調査区南部に分布する。層厚は45～60cmを測る。

ＬⅡ　褐灰色粘土（10YR4/1）である。

ＬⅢ　暗褐色土（10YR3/3）である。旧表土で、主に調査区南部に分布する遺構検出面である。層厚は５～15cmを測る。

ＬⅣ　褐色土（10YR4/6）である。ＬⅢとＬⅣの漸移層で、調査区南部のうち、ＬⅢの分布しない箇所の遺構検出面である。層厚は15～30cmを測る。

ＬＶ　黄褐色土（10YR5/6）である。しまりのややある基盤層で、層厚は30cm以上を測る。調査区北部ではＬⅢ・Ⅳが分布しないため、本層が遺構検出面である。

ＬⅥ　明褐色粘土（7.5YR5/8）である。しまりのある粘質の基盤層で、層厚は25cm以上を測る。

（菊　田）

第２節　　土　　坑

今回の調査で発見された土坑は４基である。それらは平面分布のまとまりから、北側の１・２号

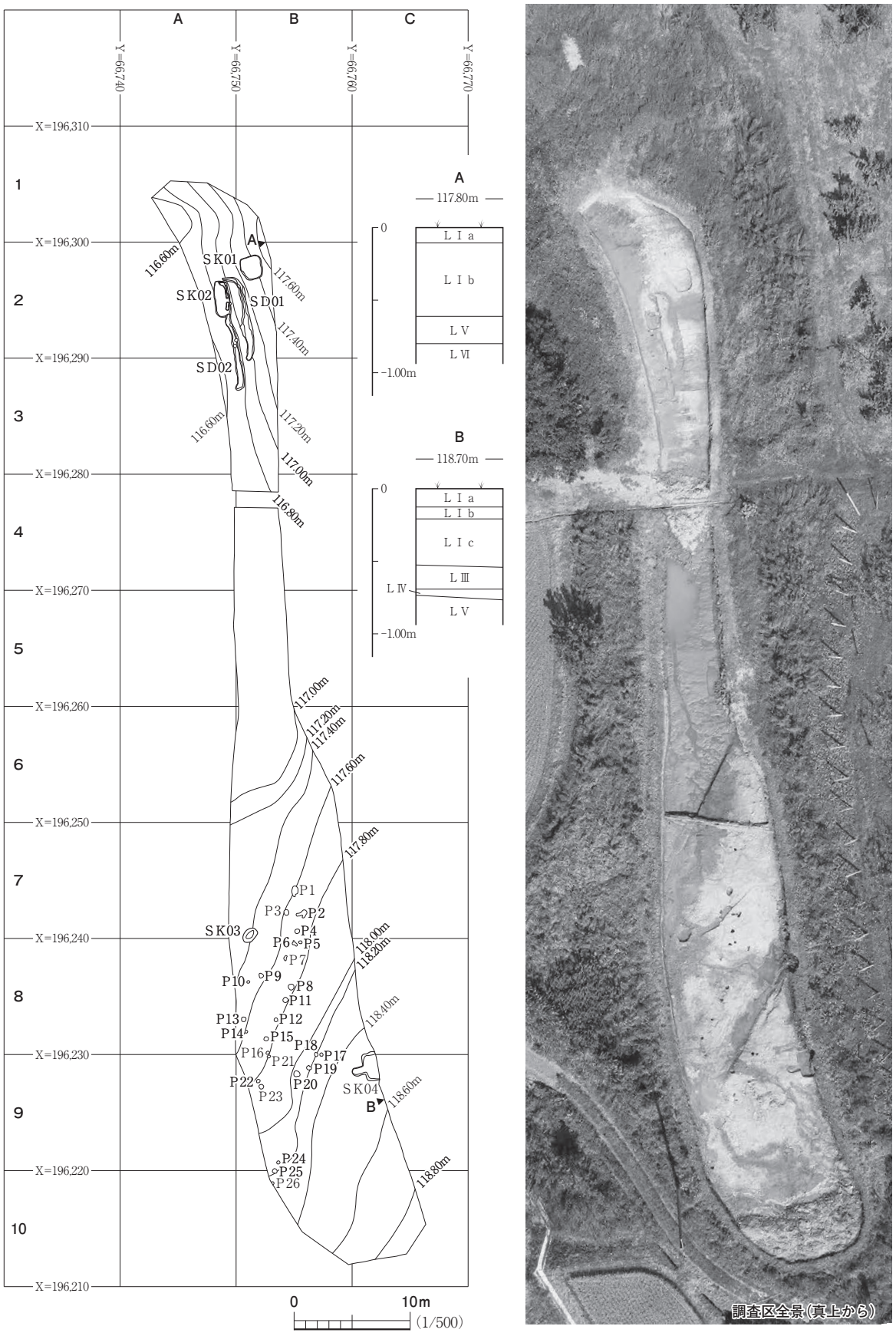


図２　遺構配置図、基本土層

土坑と、南側の３・４号土坑の２つのグループに分けられる。前者は時期・性格が不明であるが方形基調で、類似した堆積土が認められることから、同時存在した可能性が高い。後者は中世のものとみられ、３号土坑が焼成土坑、４号土坑が方形竪穴状遺構に相当する。

１号土坑　ＳＫ01（図３、写真３）

本土坑は調査区北部のＢ２グリッドに位置し、ＬＶ上面で検出された。南西約70㎝には１号溝跡が隣接している。他の遺構との重複はない。

平面形は不整な方形で、規模は、長軸2.01ｍ、短軸1.86ｍ、深さは検出面から最大21㎝を測る。東壁は急な角度で立ち上がるが、西壁の壁高は３㎝程度で、底面は平坦である。

堆積土は３層に分かれる。いずれも多量の地山塊を含む特徴が認められ、人為堆積土と考えられる。ℓ１は地山塊を多量に含んだにぶい黄褐色土、ℓ２は地山塊を多量に含んだ灰黄褐色土、ℓ３はにぶい黄褐色土塊を多量に含んだ褐色土である。遺物は出土していない。

本土坑の時期・性格は不明である。（由　井）

２号土坑　ＳＫ02（図３、写真３）

本土坑は調査区北部のＡ２グリッドに位置し、ＬＶ上面で検出された。２号溝跡と重複し、本土坑の方が新しい。ただし、断面図を作成したＡ－Ａ′はちょうど２号溝跡が途切れた箇所にぶつかり、この新古関係が表現されていない。

平面形はやや不整な隅丸長方形で、規模は、長軸3.12ｍ、短軸1.31ｍ、検出面からの深さは、12㎝を測る。東壁は急な角度で立ち上り、西壁は緩やかに立ち上がる。底面は西側に傾斜している。

堆積土は２層に分かれ、どちらも人為堆積土と考えられる。ℓ１は炭化物粒を少量、焼土粒を極少量含んだにぶい黄褐色土、ℓ２はにぶい黄褐色土塊を多量含んだ褐色土であり、ℓ２は１号土坑のℓ３と類似している。遺物は出土していない。

本土坑の時期・性格は不明である。（由　井）

３号土坑　ＳＫ03（図３、写真３）

本土坑はＢ７・８グリッドに位置し、ＬⅢ・Ⅳ上面で検出した。重複遺構はない。平面形は楕円形基調を呈し、壁面から底面はなだらかに推移する。規模は長軸1.22ｍ、短軸96㎝、検出面からの深さ96㎝を測る。

堆積土は４層に分層され、このうち底面を覆うℓ３・４は多量の炭化物を含み、その上のℓ２は焼土化した壁の崩落土である。遺物は出土しなかった。

本土坑の性格は何らかの焼成施設と考えられる。時期は、形態が古代に一般的に見られる木炭焼成土坑のように角張っていないことから、周辺状況を勘案して中世のものとみておく。（菅　原）

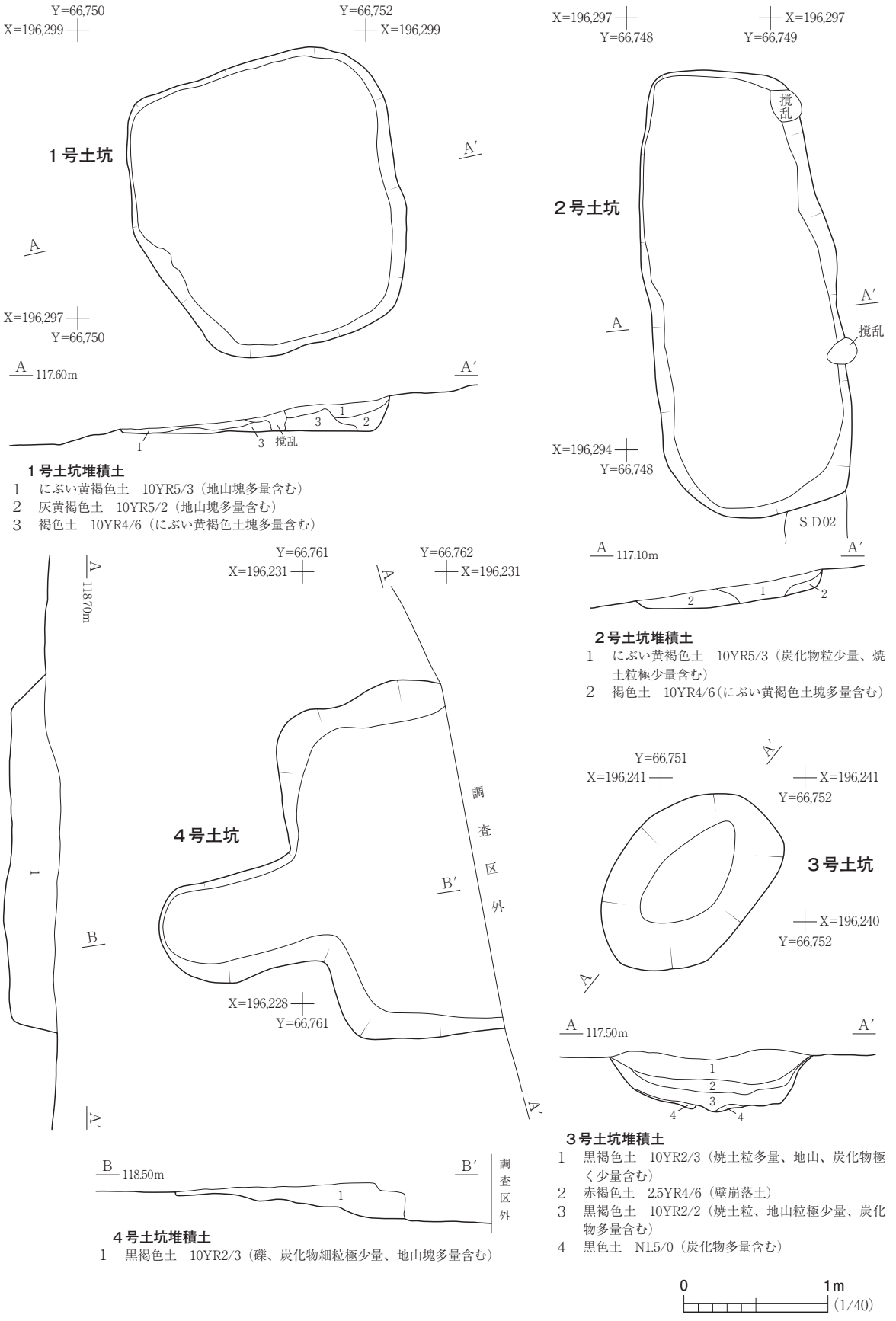

Y=66,750
X=196,299
Y=66,752
X=196,299
1号土坑
A
A′
X=196,297
Y=66,750
A
117.60m
A′
1
2
3
3
撹乱
1号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR5/3（地山塊多量含む）
2　灰黄褐色土　10YR5/2（地山塊多量含む）
3　褐色土　10YR4/6（にぶい黄褐色土塊多量含む）
X=196,297
Y=66,748
X=196,297
Y=66,749
撹乱
2号土坑
A′
A
撹乱
X=196,294
Y=66,748
S D02
A
117.10m
A′
2
1
2
2号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR5/3（炭化物粒少量、焼土粒極少量含む）
2　褐色土　10YR4/6（にぶい黄褐色土塊多量含む）
A
118.70m
A′
1
Y=66,761
X=196,231
Y=66,762
X=196,231
A
A′
4号土坑
調
査
区
外
B′
B
X=196,228
Y=66,761
B
118.50m
B′
1
調
査
区
外
4号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（礫、炭化物細粒極少量、地山塊多量含む）
Y=66,751
X=196,241
X=196,241
Y=66,752
A
A′
3号土坑
X=196,240
Y=66,752
A
A′
A
117.50m
A′
1
2
3
4
4
3号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（焼土粒多量、地山、炭化物極く少量含む）
2　赤褐色土　2.5YR4/6（壁崩落土）
3　黒褐色土　10YR2/2（焼土粒、地山粒極少量、炭化物多量含む）
4　黒色土　N1.5/0（炭化物多量含む）
0
1m
(1/40)

図3　1～4号土坑

４号土坑　ＳＫ04（図３、写真３）

本土坑はＣ８・９グリッドに位置し、ＬⅢ・Ⅳ上面で検出した。重複遺構はない。平面形は隅丸方形で竪穴状をなし、西壁に舌状の張出部が付く。東側は調査区外に続いている。

規模は長軸2.30ｍ、短軸1.26ｍ以上、検出面からの深さ40㎝を測り、底面はほぼ平坦に整えられている。しかし、貼床および明確な踏み締りは確認できなかった。また西壁の張出部は、長さ1.06ｍ、幅70㎝で、底面は先端に向かってスロープ状に立ち上がる。

遺構内全体は、地山塊を多量に含む単一層（ℓ１）で人為的に埋め戻されている。

遺物は出土していない。

本土坑は出土遺物を欠くが、各地の類例からみて、西壁に入口を持つ中世の方形竪穴状遺構に比定できると思われる。（菅　原）

第３節　溝　跡

今回の調査で発見された溝跡は２条である。等高線に沿って南北に並走しており、堆積土は類似している。したがって、同時存在したと考えられる。

１号溝跡　ＳＤ01（図４、写真４・５）

本遺構は、調査区北部のＡ２・Ｂ２・Ｂ３グリッドに位置し、ＬⅤ・Ⅵ上面で検出された。西方約50㎝には２号溝跡が隣接している。他の遺構との重複はない。

本遺構は２号溝跡と並行するようにほぼ南北に約７ｍ伸び、さらに北端で屈曲して約1.10ｍ伸びている。最大幅は1.04ｍで、深さは検出面から最大20㎝を測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土は、人為堆積土とみられる灰黄褐色土１層である。小礫を極少量、炭化物を少量、地山塊を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

本遺構は出土遺物に恵まれなかったものの、堆積土が中世の３・４号土坑および小穴群と違い、締まりがほとんどなく、ぼそぼそであることから、近世以降の所産と推定される。性格は不明である。（由　井）

２号溝跡　ＳＤ02（図４、写真４・５）

本遺構は、調査区北部のＡ２・３グリッド、Ｂ２・３グリッドに位置し、ＬⅤ・Ⅵ上面で検出された。東方約50㎝には１号溝跡が隣接している。２号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。しかし、２号土坑より本遺構の方が重複範囲の底面が深いため、ほぼ全体を検出することができた。

本遺構は１号溝跡と並行するように南北に伸び、南端が南西方向に若干曲がっている。また、

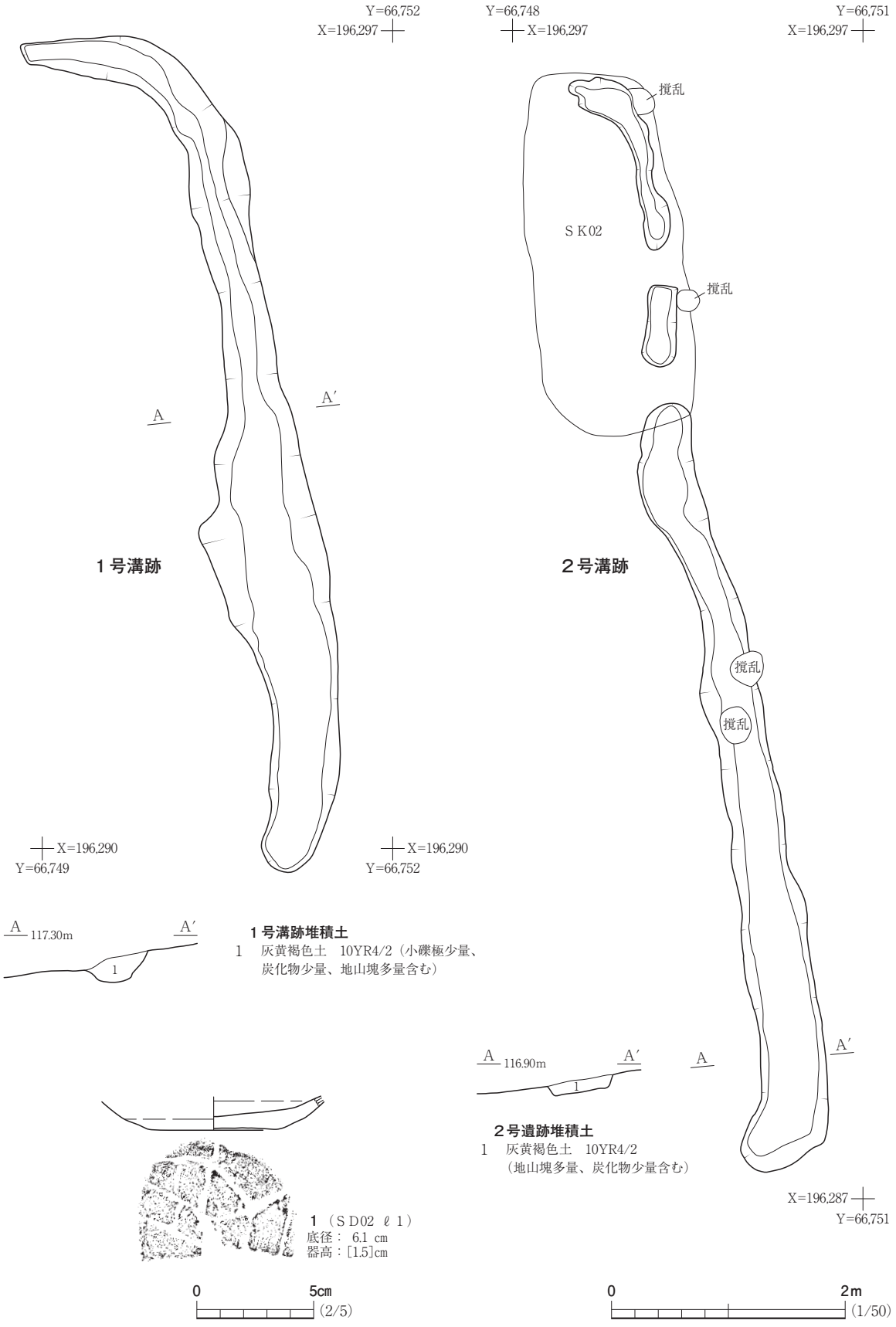


図4　1・2号溝跡、2号溝跡出土遺物

北端は西に向かって屈曲している。規模は、南北に伸びる部分で8.50ｍ、北端で屈曲した先は60cm、南端で屈曲した先は70cm、最大幅58cmで、深さは検出面から最大11cmを測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面は一部平坦な部分もあるが、撹乱の影響か全体的に凸凹であり、北側では２号土坑に壊されて遺存していない部分がある。

堆積土は人為堆積土とみられる灰黄褐色土１層である。１号溝跡ℓ１にきわめて類似し、炭化物を少量、地山塊を多量に含む。

遺物は、堆積土中より15世紀に比定されるロクロかわらけ(図４－１)が出土した。底部外面には回転糸切痕が認められ、胎土は緻密で、黄橙色を呈する。しかし、本遺構は１号溝跡と並走し、堆積土がきわめて類似することから、１号溝跡と同時存在した近世以降の所産の可能性が高く、ロクロかわらけは調査区外に存在する中世遺構からの混入品と考えられる。性格は不明である。　（由　井）

第４節　小　穴　群

確認できた小穴は26個である(図５)。調査区南部のＢ７～10グリッドで、ＬⅢ～Ⅳ上面から検出された。

それらの位置は、ちょうど中世の３号土坑と４号土坑の中間域に収まり、平面分布に「小穴群」としてのまとまりが認められる。また、等高線に沿っているのが特徴で、建物跡としては組まなかったが、直線状に並ぶものもある。

したがって、３・４号土坑と関連した中世の柵列などの性格が考えられる。

基本的な属性は、以下のとおりである。

平 面 形：円形基調

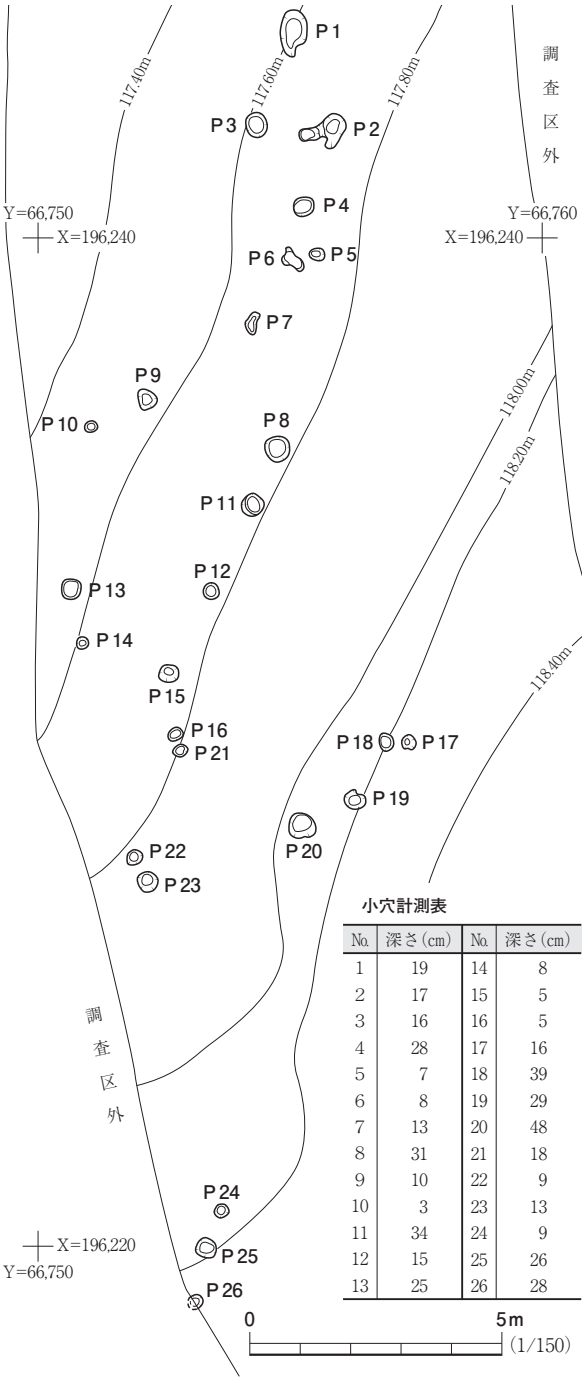
断 面 形：円筒状

大 き さ：径15～36cm(平均24cm)

深　　さ：検出面から３～48cm(平均18cm)

堆 積 土：黒褐色土　10YR2/3

出土遺物：無し　（菅　原）



小穴計測表

No.	深さ(cm)	No.	深さ(cm)
1	19	14	8
2	17	15	5
3	16	16	5
4	28	17	16
5	7	18	39
6	8	19	29
7	13	20	48
8	31	21	18
9	10	22	9
10	3	23	13
11	34	24	9
12	15	25	26
13	25	26	28

図５　小穴群

第３章　　総　　括

福田遺跡の調査は、前年度の試掘報告（福島県教育委員会2015）に基づき、竪穴住居跡で構成される古代の集落跡を予想して実施した。しかし、実際には中世室町期における武士階級の居住の場であったことが判明したと言える。

具体的根拠は、次の２点に求められる。

◎４号土坑：中世の城館、物流拠点に特徴的な方形竪穴状遺構（鈴木2006・2015他）に比定される。舌状の張出部（入口）の付く県内事例は、会津坂下町古舘遺跡（会津坂下町教育委員会1992）などにみられ、定型的なものである。

◎かわらけ：２号溝跡出土のかわらけは、福島県のかわらけ編年（福島県考古学会中近世部会1997）に従うと、15世紀中心の年代観が与えられ、使用場面は武士階級の宴会儀礼に特定できる。

ただし、中世遺構の分布密度が薄く、遺物量は少ないため、ごく短期間で廃絶したと考えられる。この所見は、対岸の沼ヶ入遺跡と一致しており、注目される。また、今回の調査区は遺跡範囲の西端付近であることから、関連遺構は東方の調査区外に広く展開していると推測される。今後の開発行為に対しては、十分な文化財保護側のチェックが必要である。　　（菅　原）

引用・参考文献

会津坂下町教育委員会　1992 「古舘遺跡」『阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書』
鈴木弘太　2006 「中世「竪穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学』第21号　日本考古学協会
鈴木弘太　2015 『中世鎌倉の都市構造と竪穴建物』同成社
東北中世考古学会　2001 『掘立と竪穴』高志書院
福島県考古学会中近世部会　1997 「かわらけ編年の再検討－11世紀～19世紀（その２）」『福島考古』38号
福島県教育委員会　2015 『福島県内遺跡分布調査報告22』

表土剥ぎ

調査区全景

第２編　沼ヶ入（ぬまがいり）遺跡（１次調査）

遺跡記号	ＤＴ－ＮＧＩ
所在地	伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡
時代・種類	縄文時代の狩猟場、中世の居住域、近世の墓域
調査期間	平成27年７月27日～９月30日
調査員	菅原祥夫・廣川紀子・由井文菜

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

沼ヶ入遺跡は、福島県伊達市霊山町下小国字沼ヶ入・御渡に所在する。地形的には、小国川南岸の開けた河岸段丘上にあたり、伊達市中心部からは南東に約５㎞離れ、浜通り地方の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線（中村街道）のルート沿いである。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、東側に隣接して福田遺跡（本書第１編）、小国川対岸の真正面に上ノ台館跡が位置している。

調査開始前の現況は、背後の丘陵と明確な段差で区切られた東向き緩斜面の畑地・荒地であった。当初、これは農地基盤整備によるものと考えていたが、調査の結果、中世の造成地形を反映していることが明らかとなった。（菅　原）

第２節　調 査 経 過

今回の調査範囲は、平成26年度の試掘調査の結果、要保存面積が確定した1,300㎡が対象である。調査期間は平成27年７月27日～９月30日である。調査期間前半の８月一杯は福田遺跡と同時進行で調査を進め、後半の９月から本遺跡単独で調査を実施し、空撮および現地引き渡しは福田遺跡と一括で行った。

調査期間前半は、まず初めに調査区の除草と排土運搬路の鉄板敷設を行い、７月27日から表土剥ぎを開始した。表土剥ぎは放射線量の計測の結果、上位３㎝を最初に除去し、その後、下位を剥ぐという２段階の工程を踏まなければならかった。さらに、周辺民家への砂ぼこりの飛散に注意しなければならなかったが、８月５日には終了し、数基の土坑のほか、掘立柱建物跡２棟を検出した。

これにより、調査の見通しが立ったことから、盆前までは福田遺跡の調査を優先することとし、検出した遺構をいったんブルーシートで養生した。

盆明け後は、福田遺跡の調査員および作業員を徐々に本遺跡に移行させながら遺構検出と精査を進め、９月に入ってからは全人員を集結させた。その結果、本遺跡は掘立柱建物跡、方形竪穴状遺構に相当する土坑、焼成土坑で構成された中世主体の遺跡であり、１号掘立柱建物跡では鬼門の方角（北東）で地鎮が行われたことが判明した。本遺跡は中村街道に面した立地で、周囲には中世城館跡やその関連遺跡の分布が顕著であることから、貴重な事例の追加になったと思われる。

こうした経過を経て、９月28日に空撮を行って実質的作業を終了し、10月５日には工事側に対して現地引き渡しを行った。（菅　原）

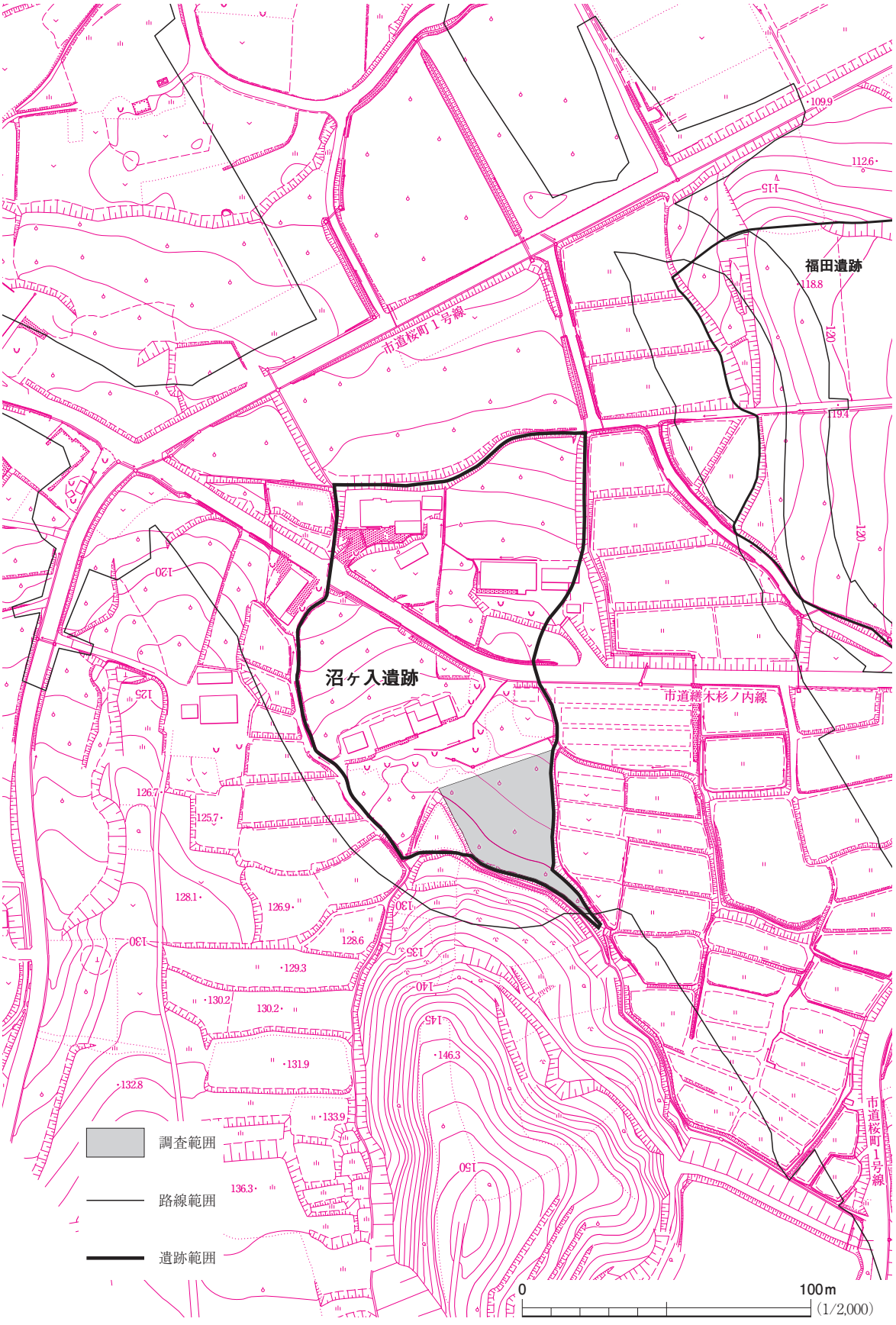

沼ヶ入遺跡
福田遺跡
市道桜町１号線
市道縫木杉ノ内線
市道桜町１号線
調査範囲
路線範囲
遺跡範囲
0
100m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の調査区は、沼ヶ入遺跡の範囲の南端付近にあたる。中村街道に面し、北へ伸びる舌状丘陵の東斜面で、切土により緩傾斜に造成されている。当初は、これが農地基盤整備に伴うものと考えていたが、調査の結果、中世までさかのぼる可能性が高まった。北東部には浅い沢が入り込み、調査区北東隅と南東隅の比高差は遺構検出面で3.2ｍである。

検出された遺構は、掘立柱建物跡２棟、土坑９基を数える。それらは営まれた時代と性格によって、次の３つに区分される。

縄文時代…５・８・９号土坑(落し穴・性格不明)

中　　世…１・２号掘立柱建物跡、１・２号土坑(方形竪穴状遺構に相当する土坑・焼成土坑)

近　　世…３・６号土坑(墓坑)

したがって、本遺跡は「縄文時代：狩猟場」→「中世：居住の場」→「近世：墓域」の変遷をたどり、中世に関しては、隣接の福田遺跡と同時存在したと推測される。　　(菅　原)

基本土層

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅴに分層している。以下、各層について説明する。

ＬⅠ　黄褐色土(10YR5/6)である。農地基盤整備に伴う盛土である。調査区全体に分布しており、支谷を埋めた北東部では厚さ１ｍ近くに達するところもある。

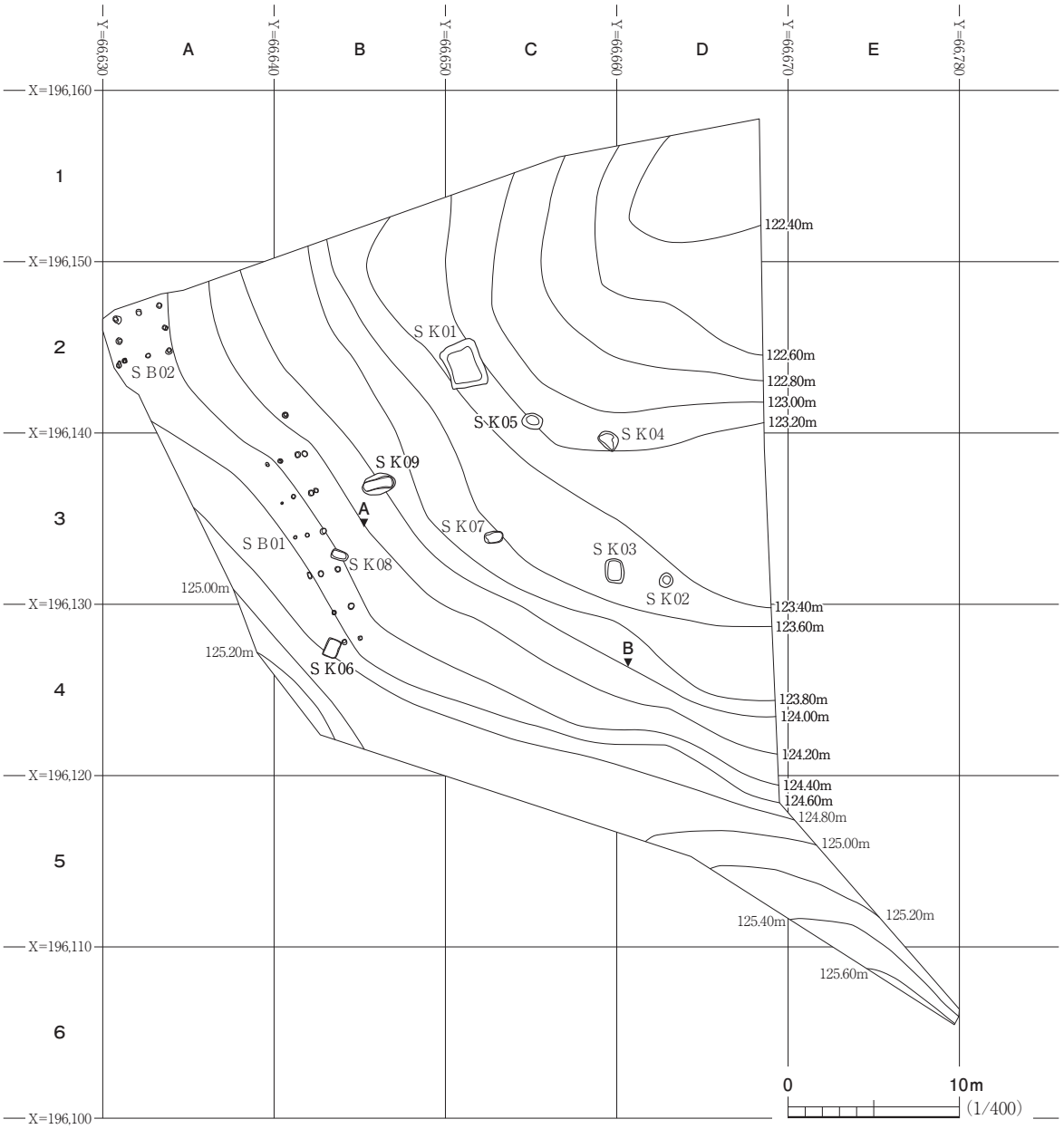
ＬⅡ　褐色土(7.5YR4/6)である。調査区の所々に分布する。層厚は15～35㎝を測る。

ＬⅢ　褐色土(10YR4/4)である。旧表土である。調査区北東部の浅い沢に分布し、層厚は、５～15㎝を測る。遺構検出面である。

ＬⅣ　にぶい黄褐色土(10YR4/3)である。ＬⅢとＬⅤの漸移層で、調査区北東部の浅い沢とその周囲に分布し、ＬⅢの分布しない箇所の遺構検出面である。層厚は、15～30㎝を測る。

ＬⅤ　黄褐色土(10YR5/6)である。しまりのややある基盤層で、調査区内で最も標高が高く、ＬⅢ・Ⅳの分布しない調査区南東部の遺構検出面である。層厚は30㎝以上を測る。

(菊　田)



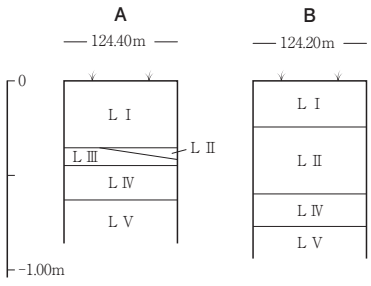


図２　遺構配置図、基本土層

第２節　掘立柱建物跡

今回の調査で発見された掘立柱建物跡は、中世に営まれた２棟である。どちらも背後の丘陵と緩斜面を区切る切土壁に沿っていた。

１号掘立柱建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図３、写真５～７）

本建物跡はＡ３グリッド、Ｂ２～４グリッドのＬＶ上面から検出された。北へ舌状に伸びる丘陵裾部の切土壁近くに位置し、方向はそれに平行するＮ19°Ｗを指す。１間×５間の長大な南北棟であり、１ｍ前後のきわめて狭い梁行長は、中世城館跡とその関連遺跡に認められる「狭梁掘立柱建物跡」（高橋1996・2002）の特徴と一致する。さらに付帯施設として、切土壁側の西側に廂（Ｐ１～４）が付き、東側の桁行柱列には、張出し（Ｐ19）および控柱（Ｐ17・18）がみられる。控柱からは中国渡来銭が出土した。

周辺遺構との関係は、南東隅の柱穴（Ｐ５）の西10㎝に６号土坑、東桁行の柱筋上に８号土坑が位置している。また、北西約8.5ｍに２号掘立柱建物跡が位置している。

芯々間による柱間寸法は、次の通りであった。

【桁　行】

東側柱列（Ｐ11－16）… 1.97ｍ＋2.33ｍ＋2.34ｍ＋2.32ｍ＋2.43ｍ＝11.39ｍ

西側柱列（Ｐ５－10）… 1.82ｍ＋2.40ｍ＋2.40ｍ＋2.37ｍ＋2.26ｍ＝11.25ｍ

【梁　行】

南側柱列（Ｐ５－11）… 0.98m

北側柱列（Ｐ10－16）… 1.12ｍ

【張出し】

（Ｐ16－19）… 2.42m

【廂】

（Ｐ１－４）… 2.48ｍ＋2.15ｍ＋2.40ｍ＝7.03ｍ

柱穴の平面形は円形基調を呈し、背後の切土壁側が小さく、前面の平場側が大きい。遺存状態は良好で、開口部の計測値は径20～25㎝、検出面からの深さは18～30㎝、柱痕跡の径は12～16㎝を測る。また、一部の柱穴では、柱痕跡に焼土・炭化物が含まれ、周囲の検出面も焼土化した状況が観察された。したがって、本建物跡は、ａ）当時の掘り込み面がほぼ保たれており、ｂ）火災にあって廃絶したと考えられる。さらに、ａ）からは、平場が中世に造成されたこと、ｂ）からは、本建物跡が後述の１号土坑（方形竪穴状遺構）と並行関係にあった可能性がうかがえる。

控柱（Ｐ17・18）は、北東の身舎柱穴（Ｐ15・16）に接して検出された。この方角は、陰陽道の鬼

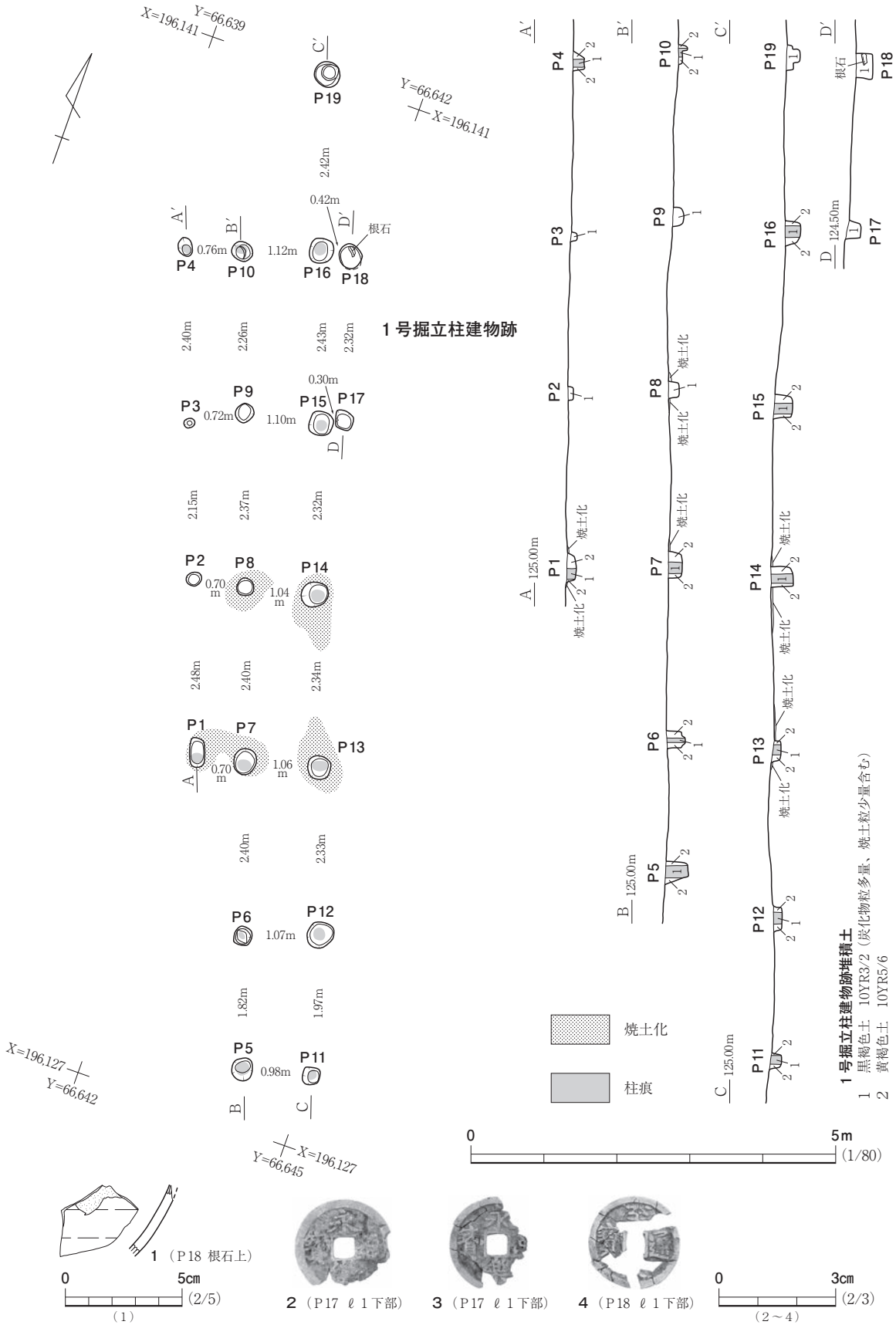


図３　１号掘立柱建物跡、出土遺物

門＝「艮」（うしとら）と一致しており、Ｐ17では、西壁際の掘形下部から裏返しの中国渡来銭２点（図３－２・３）、Ｐ18では、根石の下から裏返しの中国渡来銭１点、根石の上から中国産青磁片１点が出土した（図３－４）。それらは、建物造営時に柱を埋める過程で埋納された地鎮の「鎮物（しずめもの）」と考えられる。

遺　　物（図３、写真17）

遺物には、控柱から出土した中国渡来銭３点、中国産青磁１点があり、建物造営年代を示す定点資料となる。このうち中国渡来銭は腐食が著しいため、写真提示した。

図３－１は、Ｐ18から出土した龍泉窯産青磁碗である。小破片のため、詳細な年代特定は困難であるものの、概ね15世紀に比定される。同図２～４の中国渡来銭は、２・３がＰ17から出土した1411年初鋳の「永楽通寶」（明銭）、４が、Ｐ18から出土した1310年初鋳の「至大通寶」（元銭）である。このうち初鋳年代の新しい方の「永楽通寶」は、15世紀の日本へ大量輸入されたことが知られ、龍泉窯産青磁碗の年代観と整合すると言える。

ま と め

本建物跡は、中世城館跡に認められる「狭梁掘立柱建物跡」と同一特徴を備えている。建物造営時に地鎮が行われ、火災により廃絶したと考えられる。営まれたのは、「鎮物」の年代観から、15世紀に求められる。（菅　原）

２号掘立柱建物跡

遺　　構（図４、写真８・９）

本建物跡は、Ａ２グリッドのＬＶ上面で検出された。１号掘立柱建物跡と同じく、北へ舌状に伸びる丘陵裾部の切土壁近くに位置し、南北方向はこの切土壁にほぼ平行したＮ13°Ｗを指す。

今回確認したのは、２間×２間のほぼ正方形の範囲で、北・西側は調査区外に広がる可能性がある。また、南西隅のＰ３に隣接してＰ９が検出されたが、これは、柱痕跡の無い浅いくぼみだった。重複遺構は無く、南東約8.5ｍに１号掘立柱建物跡が位置している。

芯々間による柱間寸法は、次の通りであった。

東側柱列（Ｐ６－８）…1.34ｍ＋1.32ｍ＝2.66ｍ

西側柱列（Ｐ１－３）…1.28ｍ＋1.22ｍ＝2.50ｍ

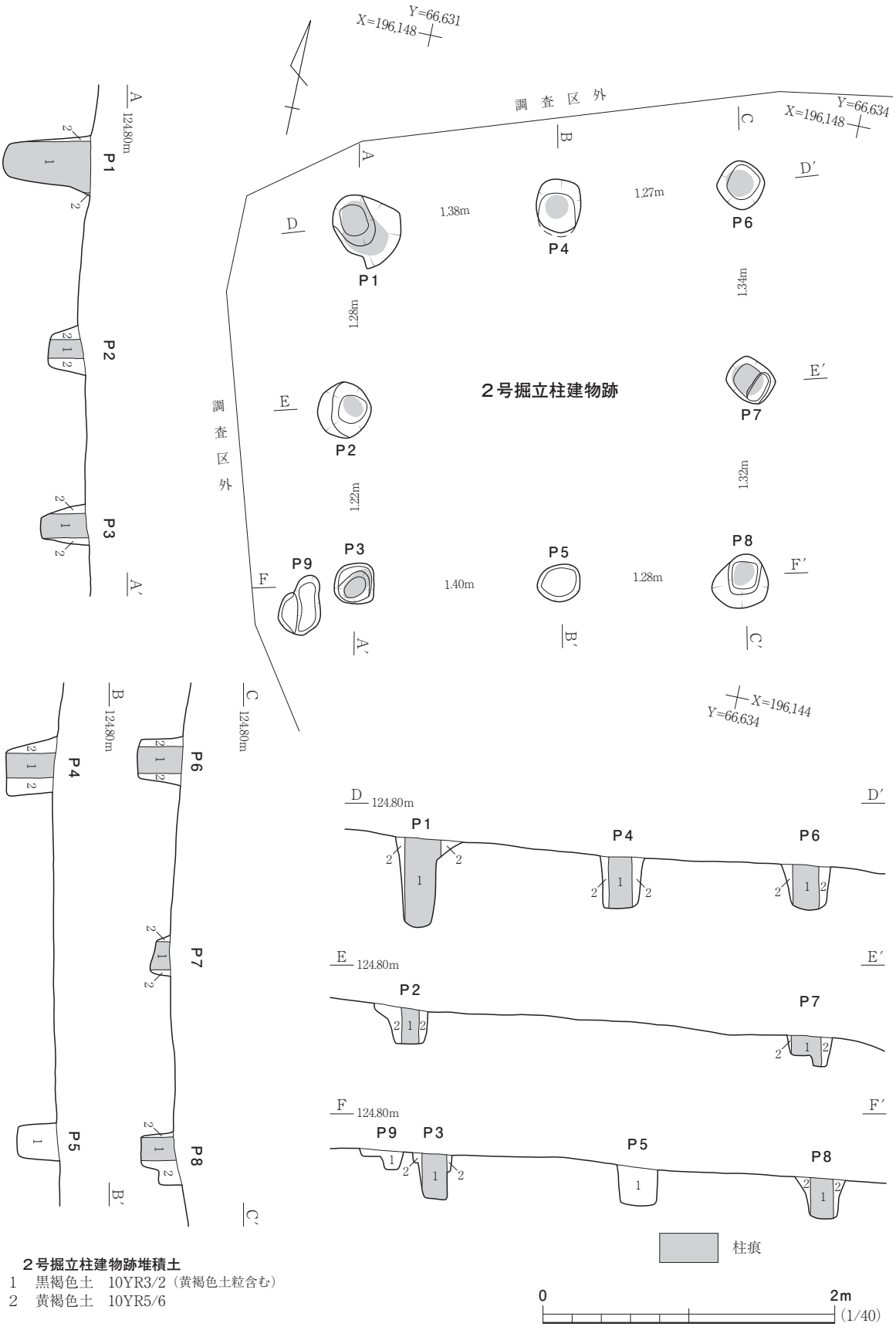
南側柱列（Ｐ３－８）…1.40ｍ＋1.28ｍ＝2.68ｍ

北側柱列（Ｐ１－６）…1.38ｍ＋1.27ｍ＝2.65ｍ

柱穴は遺存状態が良好である。平面形は円形基調で、径26～32㎝、深さ28～60㎝、柱痕跡径16～20㎝を測る。遺物は出土していない。

ま と め

本建物跡は、２間×２間以上の規模で、範囲は調査区外に広がる可能性がある。出土遺物を欠くが、１号掘立柱建物跡と同時期のものと推定しておく。（菅　原）



２号掘立柱建物跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（黄褐色土粒含む）
2　黄褐色土　10YR5/6

図４　２号掘立柱建物跡

第３節　　土　　坑

今回の調査で発見された土坑は９基である。出土遺物や周辺遺構との関係から、縄文時代、中世、近世のものに区分される。以下、登録番号順に述べる。

１号土坑　ＳＫ01（図５、写真10～13）

本土坑は、Ｂ・Ｃ２グリッドのＬⅢ・Ⅳ上面で検出された竪穴状の土坑である。平面形は台形を呈し、西壁が内側にやや弓なりで短く、北西隅と南西隅が突出している。規模は長軸2.71ｍ、短軸2.08ｍ、検出面からの深さは42㎝である。長軸方向は等高線と並行していた。重複遺構はなく、東西中軸線を西へ約9.5ｍ延長すると、１号掘立柱建物跡の張出し柱穴Ｐ19にぶつかる。

底面はほぼ平坦に整えられているものの、貼床はなく、明確な踏み締りは認められなかった。壁は、開き気味に立ち上がる。

堆積土は２層に分層された。どちらも人為堆積土と考えられる。黄褐色土塊と炭化物を含み、主に下層のℓ２から多数の焼石が投棄された状態で出土した。この所見は、中世の１号掘立柱建物跡の火災痕跡と対応するもので、両者が同時存在した可能性を示唆している。

遺物は出土しなかった。

本土坑は、方形竪穴状遺構に相当し、時期は中世と考えられる。　（菅　原）

２号土坑　ＳＫ02（図５、写真14）

本土坑は、Ｄ３グリッドのＬⅣ上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、規模は長径82㎝、短径80㎝、検出面からの深さは20㎝である。重複遺構はなく、西約２ｍに３号土坑がある。

底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がり、上部が焼土化していた。

堆積土は３層に分層され、いずれも焼土・炭化物を含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

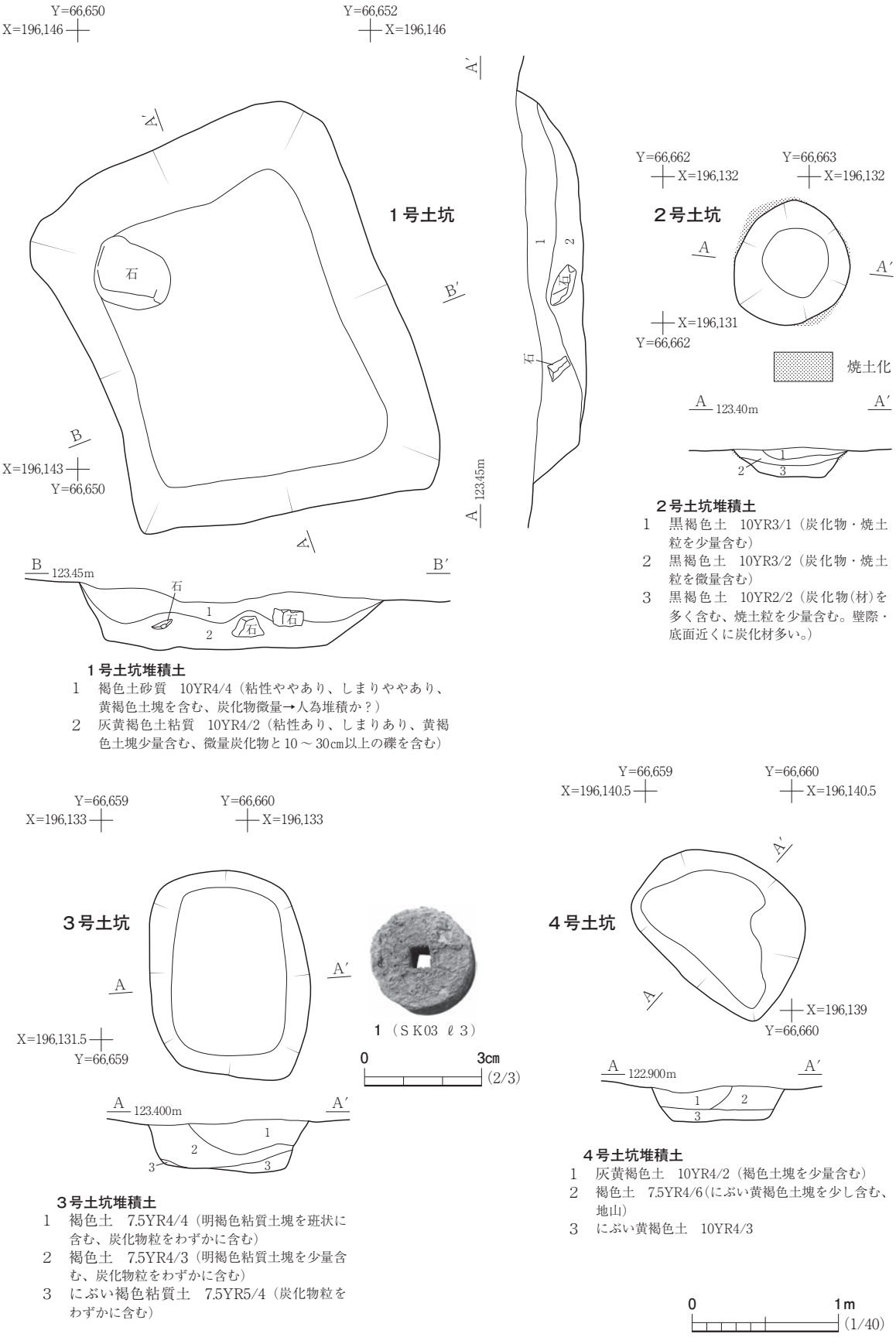
本土坑は何らかの焼成施設である。時期については明確でないが、形態が古代の木炭焼成土坑のように角張った長方形を呈さないことから、中世のものとみておく。　（菅　原）

３号土坑　ＳＫ03（図５、写真14・17）

本土坑は、調査区南部のＣ・Ｄ３グリッドに位置し、ＬⅣ上面で検出された。東側約２ｍには２号土坑、北側約６ｍには４号土坑、北西約６ｍには７号土坑が所在する。他の遺構との重複はない。

平面形はやや不整な隅丸長方形で、規模は、長軸1.40ｍ、短軸1.09ｍ、深さは検出面から最大36㎝を測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土は３層に分かれ、いずれも人為堆積したものと考えられる。ℓ１・２は炭化物粒をわずか



１号土坑堆積土

1　褐色土砂質　10YR4/4（粘性ややあり、しまりややあり、黄褐色土塊を含む、炭化物微量→人為堆積か？）
2　灰黄褐色土粘質　10YR4/2（粘性あり、しまりあり、黄褐色土塊少量含む、微量炭化物と10～30㎝以上の礫を含む）

２号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物・焼土粒を少量含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（炭化物・焼土粒を微量含む）
3　黒褐色土　10YR2/2（炭化物(材)を多く含む、焼土粒を少量含む。壁際・底面近くに炭化材多い。）

３号土坑堆積土

1　褐色土　7.5YR4/4（明褐色粘質土塊を斑状に含む、炭化物粒をわずかに含む）
2　褐色土　7.5YR4/3（明褐色粘質土塊を少量含む、炭化物粒をわずかに含む）
3　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4（炭化物粒をわずかに含む）

４号土坑堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（褐色土塊を少量含む）
2　褐色土　7.5YR4/6(にぶい黄褐色土塊を少し含む、地山)
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3

図５　１～４号土坑、出土遺物

に含み、明褐色粘質土塊を斑状に含んだ褐色土、ℓ３は炭化物粒をわずかに含んだにぶい褐色粘質土である。遺物は最下層のℓ３から、判読不明の古銭６点が結合した状態で出土した(図５－１)。だたし、調査の不手際から、明確な出土位置は不明である。

本土坑は平面形が隅丸方形で、人為的に埋め戻されており、銭貨が埋納されていることから、６号土坑と同じ近世の墓坑であると考える。（由　井）

４号土坑　ＳＫ04（図５、写真14）

本土坑はＣ２・３グリッドのＬⅢ・Ⅳ上面で検出された。平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸1.20ｍ、短軸92㎝、検出面からの深さは24㎝を測る。重複遺構はなく、西約３ｍに５号土坑がある。底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。

堆積土は３層に分層された。いずれも人為堆積土と考えられる。遺物は出土しなかった。

本土坑の時期と性格は不明である。（菅　原）

５号土坑　ＳＫ05（図６、写真14）

本土坑は、Ｃ２グリッドのＬⅢ上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.16ｍ、短径92㎝、検出面からの深さは70㎝である。重複遺構はなく、東約３ｍに４号土坑、北西約３ｍに１号土坑がある。底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がり、中位から開き気味に変化する。

堆積土は２層に分層され、いずれも自然堆積したものと考えられる。ℓ１は旧表土起源で、やや色調が異なるが、８・９号土坑のℓ１と共通のものとみられる。ℓ２は壁の崩落土である。

遺物は出土しなかった。

本土坑は縄文時代の落し穴と考えられる。（菅　原）

６号土坑　ＳＫ06（図６、写真15・17）

本土坑は、調査区南西部のＢ４グリッドに位置し、ＬⅤ上面で検出された。東10㎝には１号掘立柱建物跡Ｐ５が隣接し、北約4.5ｍには８号土坑が所在している。他の遺構との重複はない。

平面形は長方形で、規模は長軸1.08ｍ、短軸82㎝、検出面からの深さは最も深いところで18㎝を測る。壁は急な角度で立ち上り、底面は平坦である。

堆積土は３層に分かれ、いずれも人為堆積したものと考えられる。ℓ１は炭化物粒･黄褐色砂質土塊をわずかに含んだにぶい黄褐色土、ℓ２は炭化物粒、黄褐色土塊をわずかに含んだ灰黄褐色土、ℓ３はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は床面直上から「寛永通寶」が１点出土した(図６－１)。

本土坑は、平面形が長方形で、人為的に埋め戻されており、「寛永通寶」が埋納されていることから、近世の墓坑であると考える。（由　井）

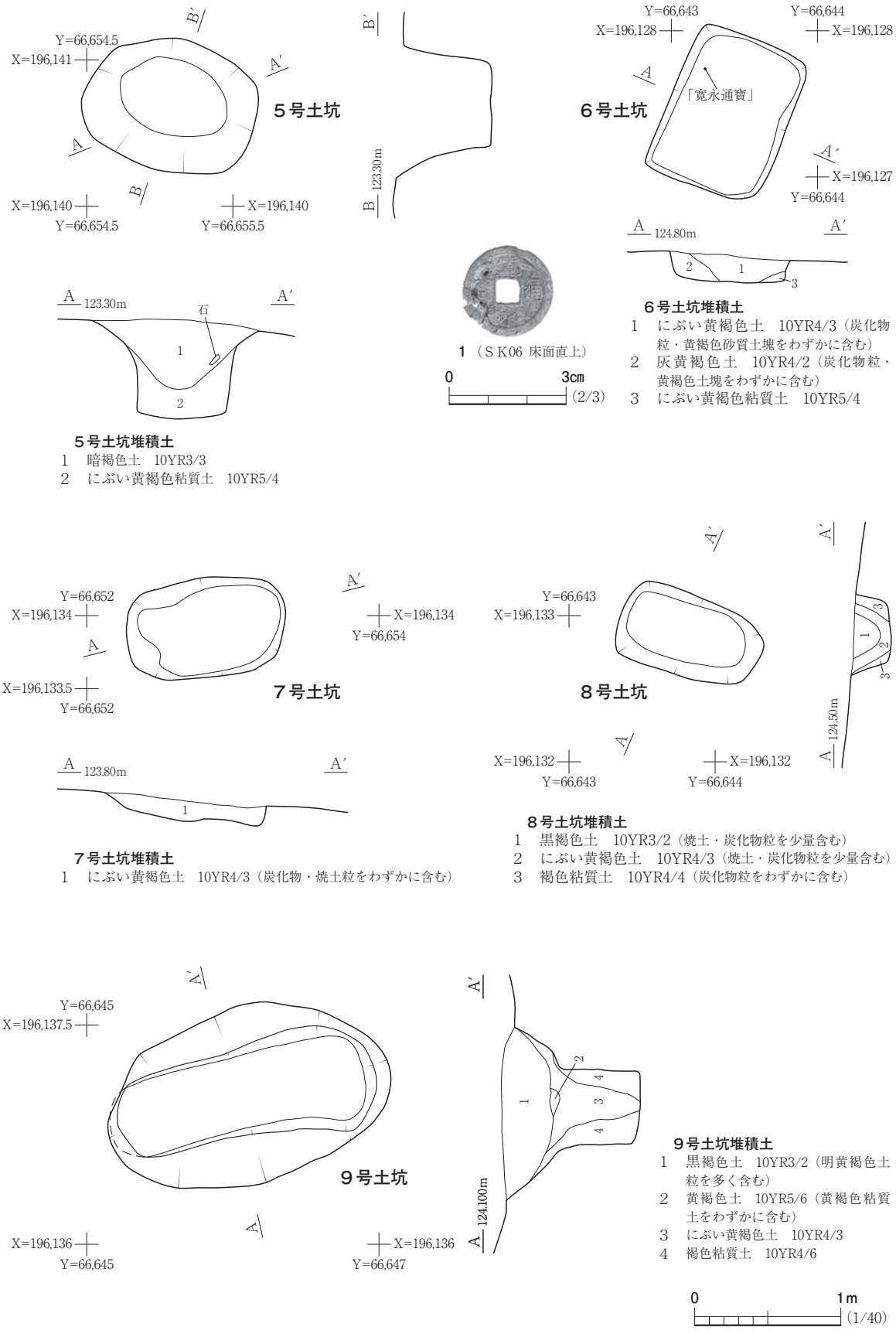


図６　５～９号土坑、出土遺物

７号土坑　ＳＫ07（図６、写真15）

本土坑は、調査区中央部のＣ３グリッドに位置し、ＬⅣ上面で検出された。南東約６ｍに３号土坑、北西約６ｍに９号土坑、西約８ｍに８号土坑が所在している。他の遺構との重複はない。

平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.09ｍ、短径69㎝で、検出面からの深さは、最も深いところで14㎝を測る。西壁は緩やかに、東壁は急な角度で立ち上がる。

堆積土は、炭化物・焼土粒をわずかに含んだにぶい黄褐色土の１層である。遺物の出土はない。

本土坑の時期・性格は不明である。（由　井）

８号土坑　ＳＫ08（図６、写真15）

本土坑は、調査区西部のＢ３グリッドに位置し、ＬⅤ上面で検出された。北東約3.5ｍには９号土坑、東約８ｍには７号土坑が所在する。他の遺構との重複はない。

平面形はやや不整な隅丸長方形で、規模は、長軸99㎝、短軸55㎝、検出面からの深さは、最も深いところで30㎝を測る。壁は、急な角度で立ち上がる。

堆積土は３層に分かれ、いずれも自然堆積したものと考えられる。ℓ１は焼土・炭化物粒を少量含んだ旧表土起源の黒褐色土、ℓ２は焼土・炭化物粒を少量含んだにぶい黄褐色土、ℓ３は炭化物粒をわずかに含んだ褐色粘質土である。遺物は出土していない。

本土坑は、ℓ１が５・９号土坑のℓ１と共通した旧表土起源の堆積土であることから、縄文時代に営まれた土坑と考える。性格は不明である。（由　井）

９号土坑　ＳＫ09（図６、写真15）

本土坑は、Ｂ３グリッドのＬⅣ上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径1.98ｍ、短径1.22ｍ、検出面からの深さは96㎝である。重複遺構はなく、南西約４ｍに８号土坑がある。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、北・南壁では中位から大きく開く形態に変化している。

堆積土は２層に分層され、いずれも自然堆積土と考えられる。ℓ１は、５・８号土坑と共通の旧表土起源の流入土、Ｐ２～４は、壁の崩落土および周辺土砂の流入土である。

遺物は出土しなかった。

本土坑は縄文時代の落し穴と考えられる。（菅　原）

第３章　　総　　括

今回の調査では、[縄文時代：狩猟場]→[中世：居住の場]→[近世：墓域]の変遷が確認された。特に、中世の成果は特筆されるもので、福田遺跡、上ノ台館跡と一体的な関連が想定できる（図７）。そこで以下、この点に焦点を絞り、調査成果の総括を行う。

第１節　沼ヶ入遺跡の１次調査でわかったこと

① 沼ヶ入遺跡が所在する伊達市霊山町下小国地区は、浜通り地方と中通り地方をつなぐ中村街道（現国道115号線）に面し、隣接の掛田地区は、中村街道と南北方向の道路（現国道349号線）が交差した交通の要衝に位置する。この地理的特性を反映して、中世室町期の周辺一帯は懸田氏歴代の居城とされる懸田城跡を筆頭に城館跡の存在が顕著であり、経石を埋納した塚群もある（図８）。本遺跡は、こうした遺跡群の1つと評価される。

② 北へ伸びる舌状丘陵の東斜面を造成した平場（図９）で、掘立柱建物跡２棟（ＳＢ01・02）、方形竪穴状遺構に比定される土坑１基（ＳＫ01）、焼成土坑１基（ＳＫ02）が検出された。それら

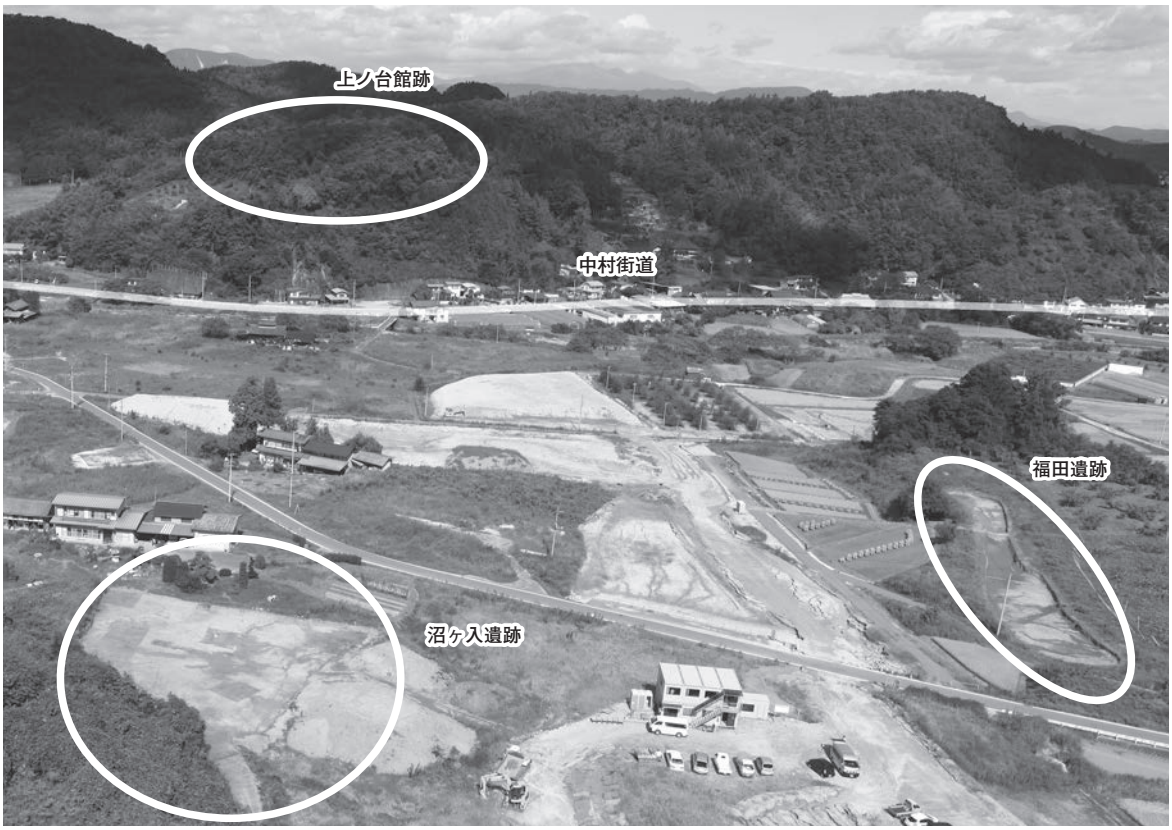


図７　遺跡の位置関係

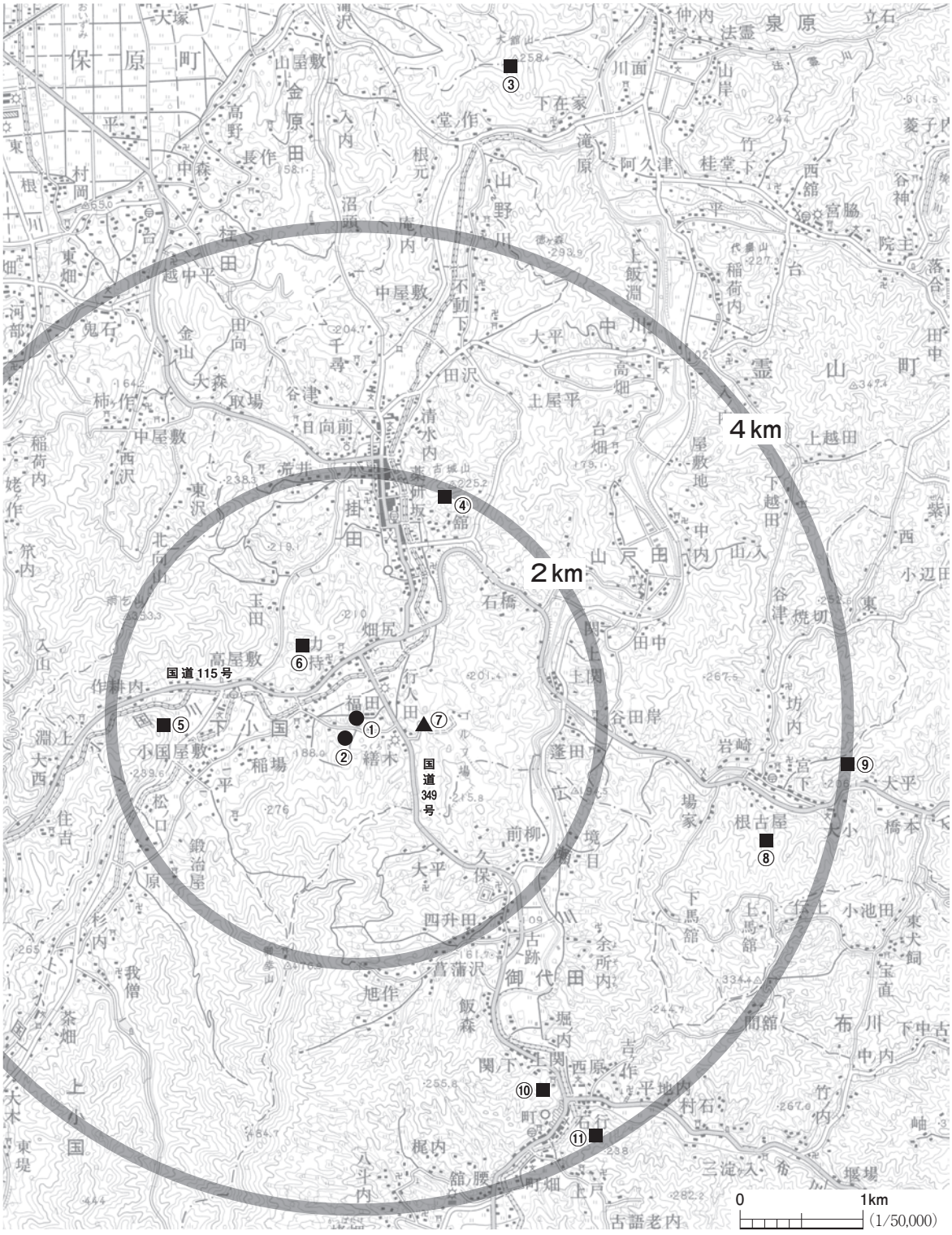

4km
2km
国道115号
国道349号
③
④
⑤
⑥
①
②
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
0
1km
(1/50,000)
● 城館関連
■ 城館跡
▲ 塚跡（経石埋納）
①福田遺跡
②沼ヶ入遺跡
③山野川大館
④懸田城跡
⑤小国城跡
⑥上ノ台館跡
⑦行人田塚
⑧小館跡
⑨大館跡
⑩殿上館跡
⑪月見館跡

図８　関連遺跡の分布

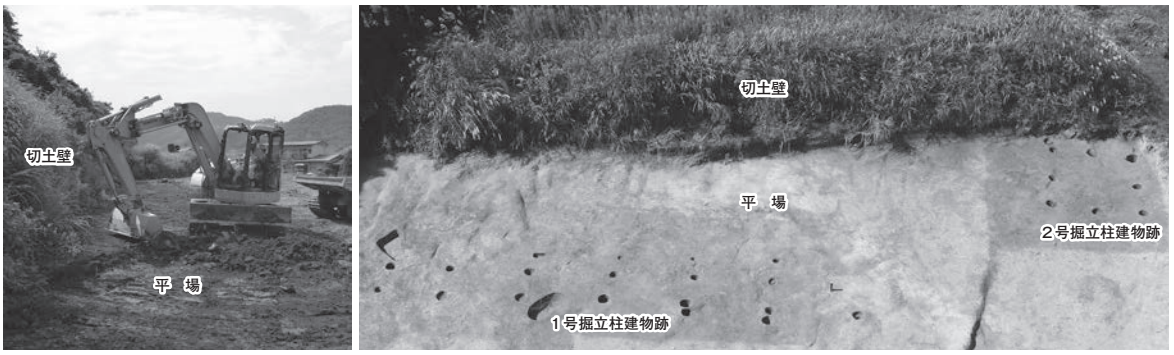


図９　平場と建物配置

の分布密度はまばらであり、重複関係は認められない。これに出土遺物の年代観を勘案すると、存続時期は15世紀のごく短期間と考えられ、廃絶要因は１号掘立柱建物跡と１号土坑の所見から火災に求められる。

③　全体像が判明した１号掘立柱建物跡は、中世城館跡とその関連遺跡に特有の狭梁掘立柱建物跡（図10）の特徴を備えている。当該類型はきわめて狭い梁行構造（１間で、1.7尺～4.6尺）に加え、次の傾向が指摘されている（川俣町教育委員会1996）。

Ａ：建設立地は、丘陵傾斜地に造成した平場がほとんどである。

Ｂ：建設位置は、切土壁際に近く建ち、切土壁に平行する例が圧倒的に多い。

Ｃ：柱穴は、切土壁側は小さく、前面の平場側が大きい。

Ｄ：桁行の柱間寸法は、14世紀後葉頃：6.2尺→その後：８尺多用→16世紀中頃：６～７尺の変遷をたどる。

このうちＡ～Ｃは１号掘立柱建物跡にもあてはまり、本建物跡がこれまでの県内事例と確実に同一系譜であることがうかがえる。また、Ｄから導き出せる15世紀の年代観は、出土遺物の年代観と整合していると言えよう（図10上：８尺、図11左）。

④　方形竪穴状遺構は、城館跡や津・宿場などの物流拠点に多く（鈴木2006他）、このことからも、本遺跡の性格が追認できる。

⑤　１号掘立柱建物跡の北東位置に配置された控柱跡から、建物造営に伴う地鎮跡が確認された（図11－１）。陰陽道では北東を鬼門、反対の南西を裏鬼門としており（同図２・３）、古代から現代に至るまでそれらの方角の柱穴に銭貨を埋納する風習がある。本例は、前者の新事例である。

第２節　周辺遺跡との関連

最後に、福田遺跡および上ノ台館跡との関係に着目してみる（図７）。

福田遺跡は、沼ヶ入遺跡と隣接し、方形竪穴状遺構と焼土土坑が検出され、15世紀に武士階級が宴会儀礼を行ったことを示す、かわらけが出土している。また、上ノ台館跡については、縄張り図作成を依頼した室野秀文氏から、「上ノ台館跡は沼ヶ入・福田遺跡を見下ろす小国川対岸にあ

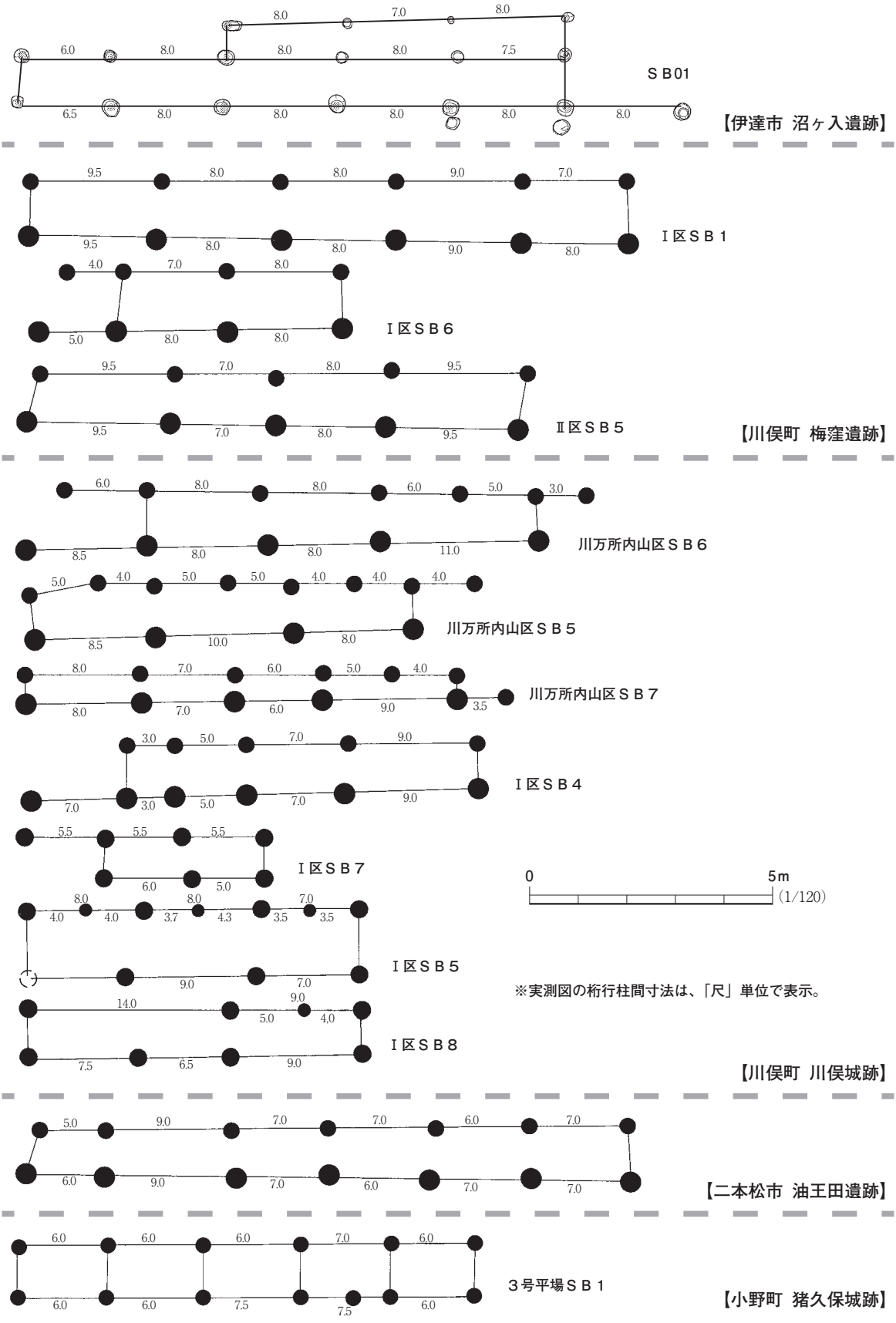


図10　狭梁掘立柱建物跡の集成

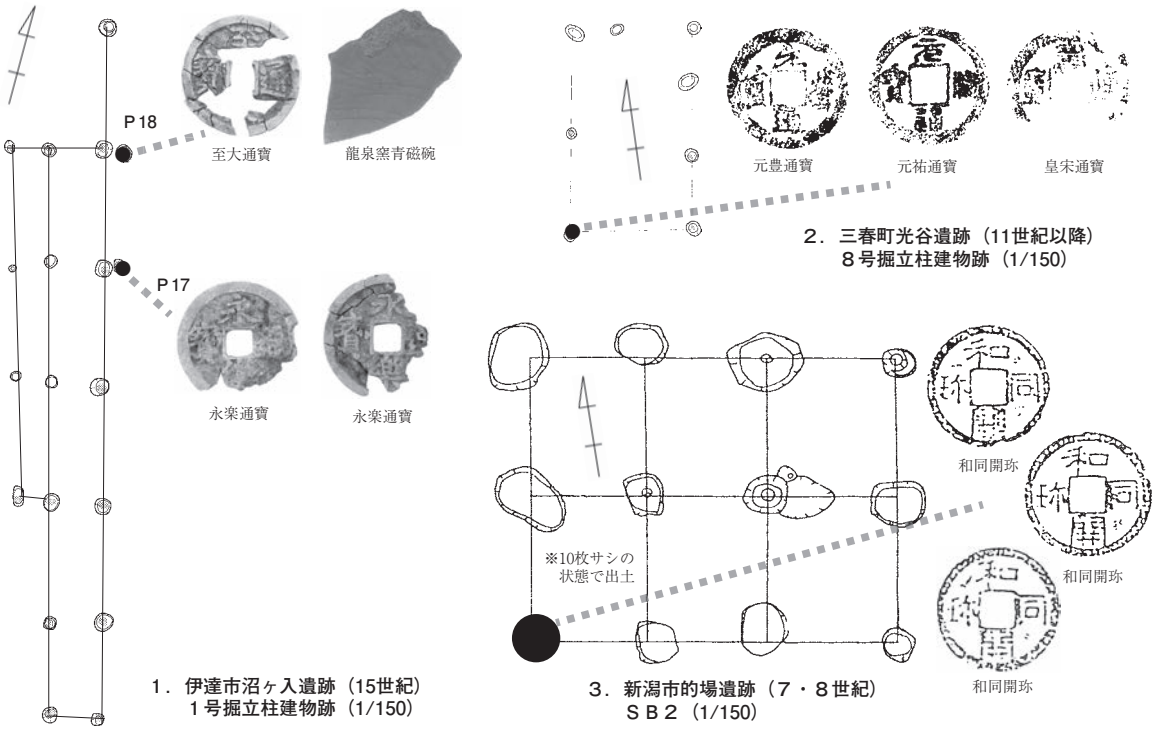


図11　地鎮

り、15世紀から16世紀までのいずれかの時期に臨時的に構築された陣所や砦ではないか。」というコメントをいただいている。

以上から、３遺跡は密接な関係だった可能性があり、このうち沼ヶ入・福田遺跡は、土塁や掘切の痕跡が無く、急斜面の立地でないことから、城館の関連遺跡とみるのが妥当と思われる。次年度以降の調査では、こうした視点を念頭に置いて調査を行っていく必要がある。　　（菅　原）

引用・参考文献

会津坂下町教育委員会　1992 「古舘遺跡」『阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書』
川俣町教育委員会　1996 『梅窪遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
川俣町教育委員会　2002 『河股城跡発掘調査報告書』
芝田　悟　1997 「石川県下の地鎮祭祀に関わる銭貨(古代～中世)」『出土銭貨』７　出土銭貨研究会
嶋谷和彦　1997 「中世の地鎮と銭貨」『出土銭貨』７　出土銭貨研究会
鈴木弘太　2006 「中世「竪穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学』第21号　日本考古学協会
鈴木弘太　2015 『中世鎌倉の都市構造と竪穴建物』同成社
東北中世考古学会　2001 『掘立と竪穴』高志書院
鳥取県教育文化財団　2005 「ＳＢ１の出土銭貨について」『南原千軒遺跡』
戸根与八郎　1997 「新潟県下の地鎮めと銭貨」『出土銭貨』７　出土銭貨研究会
二本松市教育委員会　1981 『油王田遺跡』
福島県考古学会中近世部会　1997 「かわらけ編年の再検討－11世紀～19世紀(その２)」『福島考古』38号
福島県教育委員会　1994 「猪久保城跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告28』
福島県教育委員会　1992 「光谷遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告６』
福島県教育委員会　2015 『福島県内遺跡分布調査報告22』
霊山町　1992 『霊山町史　第１巻通史』

第３編　上ノ台（かみのだい）遺跡

遺跡記号　ＤＴ－ＫＮＤ
所在地　伊達市霊山町下小国字玉田
時代・種類　縄文時代の遺物包含層、中世以降の木炭生産
調査期間　平成27年10月13日～11月25日
調査員　菅原祥夫・廣川紀子・由井文菜

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

上ノ台遺跡は、福島県伊達市霊山町下小国字玉田に所在する。地形的には、小国川北岸に広がる丘陵上にあたり、伊達市中心部からは南東に約５㎞離れ、太平洋沿岸の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線（中村街道）のルート沿いである。周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が認められるのが特徴で、本遺跡の一部は上ノ台館跡と重複し、小国川対岸には、武士階級の居住の場と推定される福田遺跡（第１編）および沼ヶ入遺跡（第２編）が位置している。

今回の調査区は、平成27年度の試掘調査の結果、新規登録された遺跡範囲の全体である。調査開始前の現況は山林であり、遺構検出面の標高は約162.0～176.0ｍを測る。　（菅　原）

第２節　調　査　経　過

今回の調査は、平成27年度の試掘調査で要保存面積が確定した900㎡が対象となった。調査期間は、平成27年10月13日～11月25日である。工事側による立木伐採の完了を受けて、まず調査区内の雑木片付けと、ヤード内の器材庫・トイレ設置を行い、10月15日から、表土剥ぎおよび人力による遺構検出を開始した。表土剥ぎは放射線量の計測の結果、上位８㎝を最初に除去し、その後、下位を剥ぐという２段階の工程を踏んでいる。

本遺跡は、深い谷地形に立地しているため、十分な安全帯を確保した上で作業を進めることとした。この結果、20日ごろまでには、急傾斜の北東側に遺構が存在しないことが判明し、以後は、傾斜の比較的緩やかな斜面中位～谷底の掘り込みが中心となった。

10月下旬になると、谷底から縄文時代の遺物包含層の輪郭が見えはじめ、斜面中位の傾斜変換点では木炭窯跡が検出された。そこで、作業員を二手に分け、遺物包含層に関しては２本のトレンチを設定し、その土層断面と調査区南壁の土層断面を対比しながら、層位的に遺物を取り上げていった。出土点数は少なかったものの、時期的には縄文時代後期主体のまとまりがみられ、一定の成果を収めることができた。

一方、木炭窯跡は十字に土層観察用畔を残して掘り進めたところ、隅丸長方形の大型土坑タイプで、底面中軸に溝を有する構造であることが判明した。また、取り残しの木炭が並んだ状態で発見され（写真５－ｄ）、窯詰め方法の一端を窺うことができた。

こうした経過を経て、11月上旬には調査終了のおおよその見通しがつき、10～15日に地形測量、24・25日に器材運搬を行い、翌26日には工事側に現地を引き渡して、本年度の発掘調査の一切を完了した。　（菅　原）

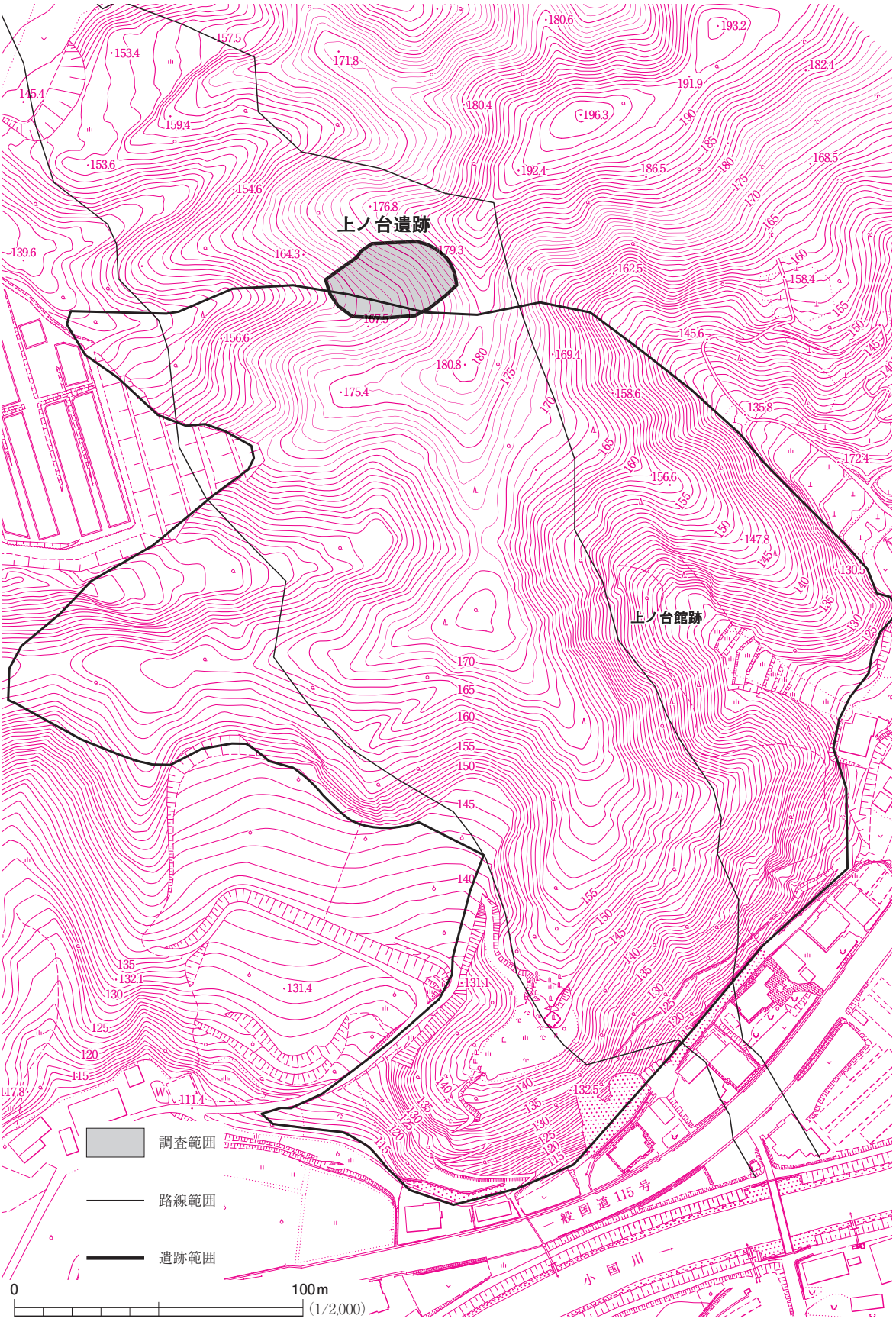


図１　調査区位置図

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

上ノ台遺跡の調査では、木炭窯跡１基、遺物包含層１カ所が検出された。木炭窯跡は、深い谷を囲む南向き斜面中位の傾斜変換点に構築されており、中世以降のものと思われる。遺物包含層は谷底に形成されたもので、縄文時代後期主体の遺物が出土した。

なお、本遺跡の一部と重複する上ノ台館跡の関連遺構は、発見されなかった。

基本土層

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅳに分層し、さらにＬⅡについてはＬⅡａとＬⅡｂに細分している。遺物包含層の該当するのはＬⅢであり、図２上に平面分布範囲を網点で示した。

以下、説明する。

ＬⅠ　黒褐色土(7.5YR3/1)である。現表土下の腐食土層で、調査区全体に分布する。層厚は10～15cmを測る。

ＬⅡａ　褐色土(7.5YR4/4)である。遺物包含層のＬⅢより一回り広範囲に分布し、層厚は、15～25cmを測る。

ＬⅡｂ　褐色土(7.5YR4/3)である。同じく、遺物包含層のＬⅢより一回り広範囲に分布し、ＬⅡａより色調がやや暗く、ＬⅢとの漸移層と考えられる。層厚は10～25cmを測る。

ＬⅢ　黒褐色土(10YR3/2)である。遺物包含層で、谷底に分布する。層厚は、10～23cmを測る。

ＬⅣ　にぶい黄橙色粘質土(10YR7/4)である。基盤層で、層厚は50cm以上を測る。　（菅　原）

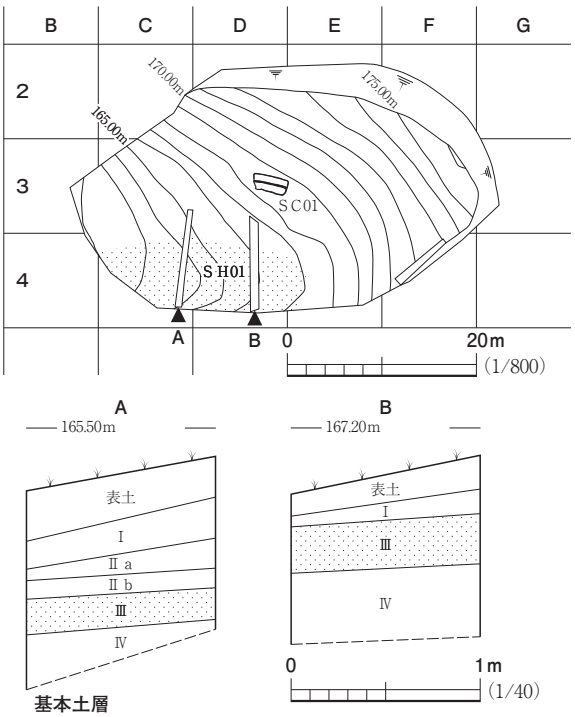


図２　基本土層

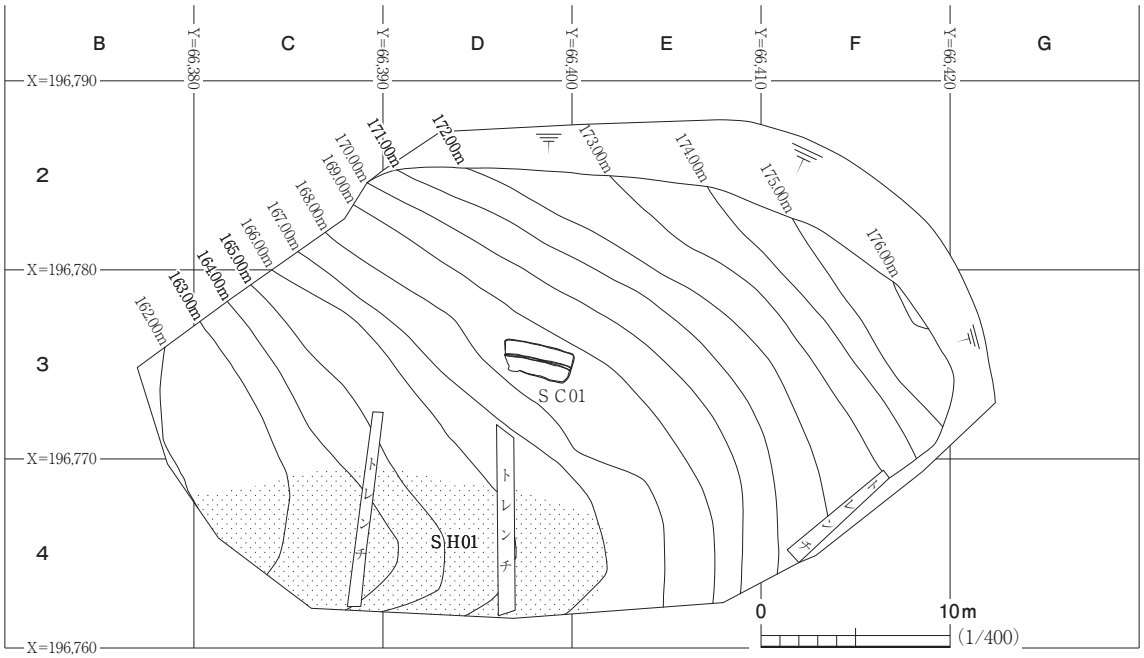


図３　遺構配置図

第２節　木 炭 窯 跡

１号木炭窯跡　ＳＣ01（図４、写真３～６）

本木炭窯跡は、調査区中央のＤ・Ｅ３グリッドに位置し、ＬⅣ上面で検出された。

平面形は隅丸長方形である。規模は、長軸3.64ｍ、短軸1.57ｍで、深さは検出面から最大30㎝を測る。壁は西壁から南壁の一部分が欠けており、北西角に厚さ１㎝程度の赤褐色の焼土化範囲を確認した。底面は凸凹で、中央に長軸方向と同じ方向に走る１条の溝を検出し、南側に赤褐色の焼土化範囲、西側に焼土粒、炭化物粒の散らばりを確認した。溝の規模は、幅11～18㎝、深さは底面から最大４㎝を測る。

堆積土は４層に分かれ、このうち溝内に堆積するℓ４は、底面を覆うℓ２・３と明確に区別される。このことから、溝は遺構廃絶時には既に埋まっていたことがうかがえる。

遺物は、取り残しの木炭が南壁際および北壁際から底面中央に向かって、規則正しく並んで出土した(写真５－ｄ)。

本木炭窯跡は、隅丸長方形の大型土坑タイプで、遺構内堆積土に被熱した天井部分の焼土塊が含まれていないことから、伏せ焼きにより木炭を焼成した遺構と考える。また、木炭の出土状況から、製品の窯詰め方法の一端がうかがえる。時期については、土器等の出土遺物がなく、特定はできないが、福島県内の調査事例から中世以降に営まれたと考えられる。　（由　井）

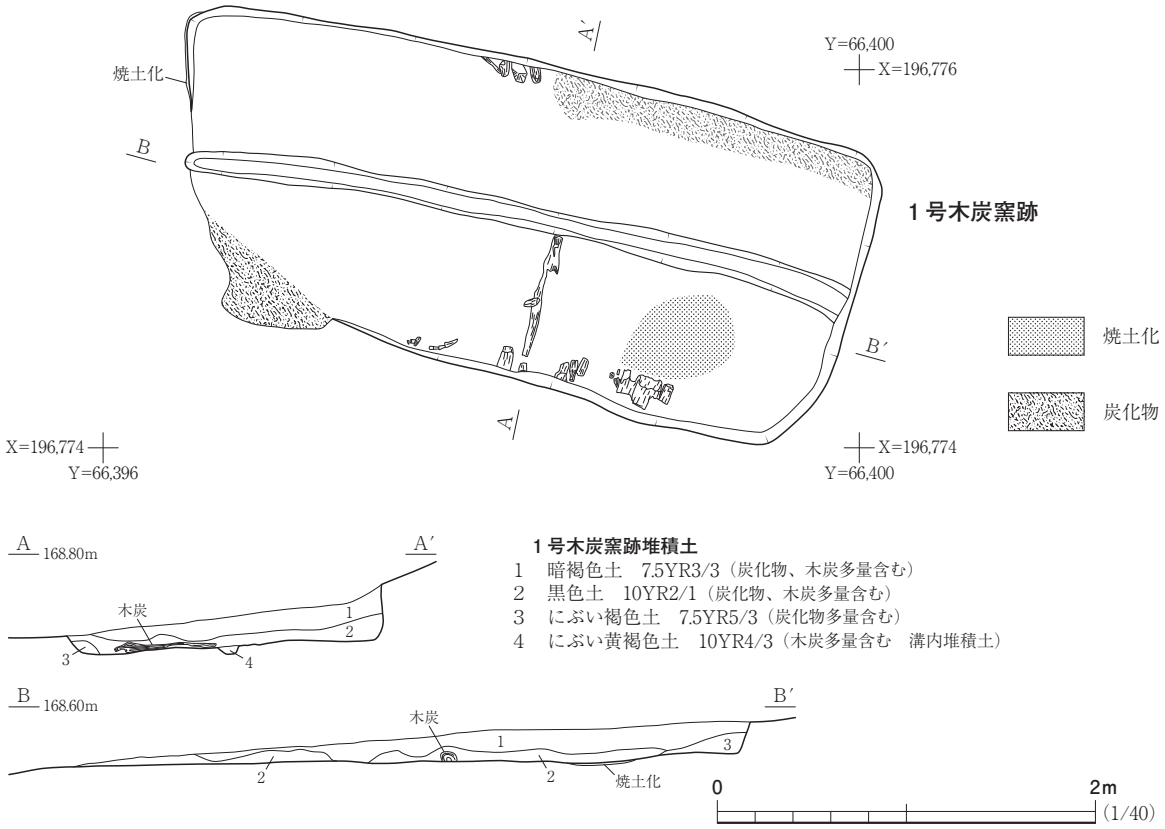


図４　１号木炭窯跡

第３節　遺 物 包 含 層

概　　要

遺物包含層に該当するのは、谷底のＣ～Ｅ４グリッドに形成された基本土層ＬⅢである(図２)。炭化物をごく少量含む黒褐色土で、縄文時代後期主体の土器片と石器を包含している。

調査方法は、上層を取り除いて平面分布範囲を捉えた後、谷底中軸に直交する方向で２本のトレンチを設定し、その土層断面と調査区西壁の土層断面を対比しながら、掘り進めていった。その結果、出土したのは縄文土器片35点、石器３点である。

遺　　物（図５・６、写真８）

縄文土器片６点、石器３点を図示した。

縄文土器

図５－１・２は口縁部片である。１は平口縁で、上端に連続刺突文が観察され、２は突起を有し、瘤と平行沈線が観察される。同図３・４・５・６は、体部片である。４・５・６は地文のみ、３は磨消縄文が観察される。いずれも、縄文時代後期後半に比定できると思われる。

石　器

図５－７は、珪質凝灰岩製の尖頭器である。下半部欠損のため不明だが、有舌尖頭器の可能性もある。平面形は柳葉形もしくは細形で、横断面形はやや厚手の凸レンズ状を呈する。同図８は、凝灰質砂岩製の打製石斧である。円刃両刃で、平面形は基部両側縁が弧状となる撥形を呈する。刃部に使用による長軸方向の線状痕が観察される。図６－１も、凝灰質砂岩製の打製石斧である。直刃両刃で、平面形は中央よりやや上部に抉りが弧状に入り、分銅形を呈する。

ま と め

谷底に形成された、縄文時代後期主体の遺物包含層である。出土遺物は少なく、谷を囲むやせ尾根上から縄文時代の遺構が検出されていないことから、一定人数の定住生活に伴うものではないと考えられる。（菅　原）

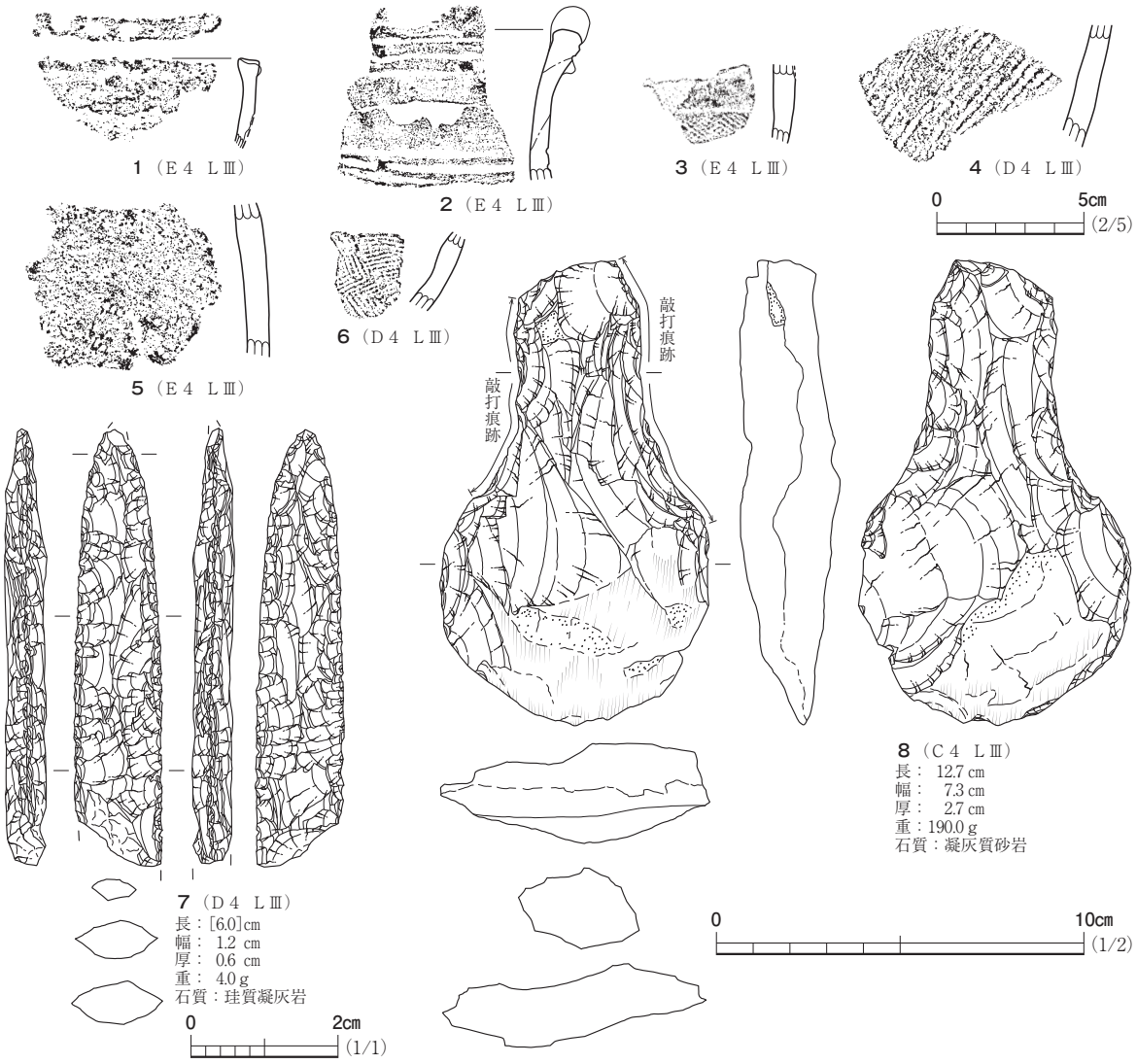


図５　１号遺物包含層出土遺物（１）

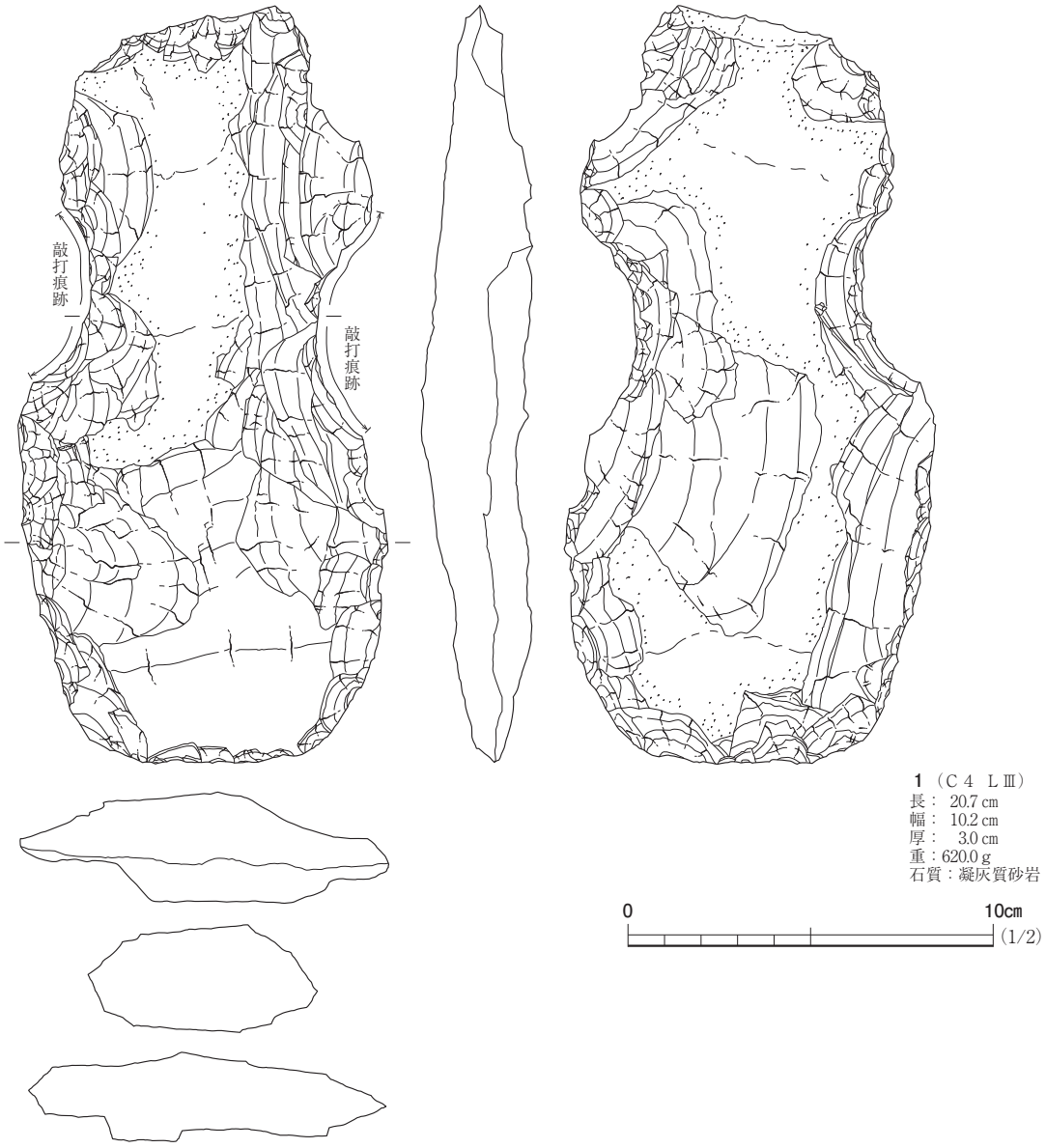


図６　１号遺物包含層出土遺物（２）

第３章　　総　　括

上ノ台遺跡は、平成27年度の試掘調査で縄文土器片が発見され、新規登録されたものである（福島県教育委員会2016）。範囲の一部は、上ノ台館跡の北縁にかかっている。今回の調査は、遺跡全体が対象となった。

以下、成果を要約する。

① 谷底から、縄文時代後期主体の遺物包含層１カ所が検出された。遺物量は少なく、周囲のやせ尾根上に同時期の遺構が存在しないことから、一定人数の定住生活に伴うものではないと考えられる。序章第３節で述べたように、本遺跡周辺では縄文時代後期の集落跡が小規模・分散化する傾向がみられ、これに連動した現象と評価できるかもしれない。

② 斜面中位の傾斜変換点から、木炭窯跡が１基検出された。隅丸長方形の大型土坑タイプで、底面に溝を有している。時期は中世以降と思われる。

③ 中世城館跡の上ノ台館跡に関わる遺構は、発見されなかった。　　（菅　原）

引用・参考文献

福島県教育委員会　2016『福島県遺跡分布調査報告書23』
霊山町　1992『霊山町史　第１巻通史』

作業風景

写　真　図　版

第１編　福田（ふくだ）遺　跡

1　調査区遠景（東から）

2　調査区全景（北西から）

3　1～4号土坑

a　1号土坑全景（南から）　**b**　1号土坑断面（南から）
c　2号土坑全景（南から）　**d**　2号土坑断面（南から）
e　3号土坑全景（南東から）　**f**　3号土坑断面（南東から）
g　4号土坑全景（西から）　**h**　4号土坑断面（南から）

4　１・２号溝跡全景（南から）

5　１・２号溝跡全景（南西から）

6　作業風景（南西から）

7　調査状況と出土遺物

a　表土剥ぎ（南から）
b　作業風景（北から）　　c　２号溝跡出土遺物

写　真　図　版

第２編　沼ヶ入（ぬまがいり）遺跡（１次調査）

1　調査区遠景（北から）

2　調査区遠景（南から）

３　調査区遠景（南東から）

４　調査区全景（東から）

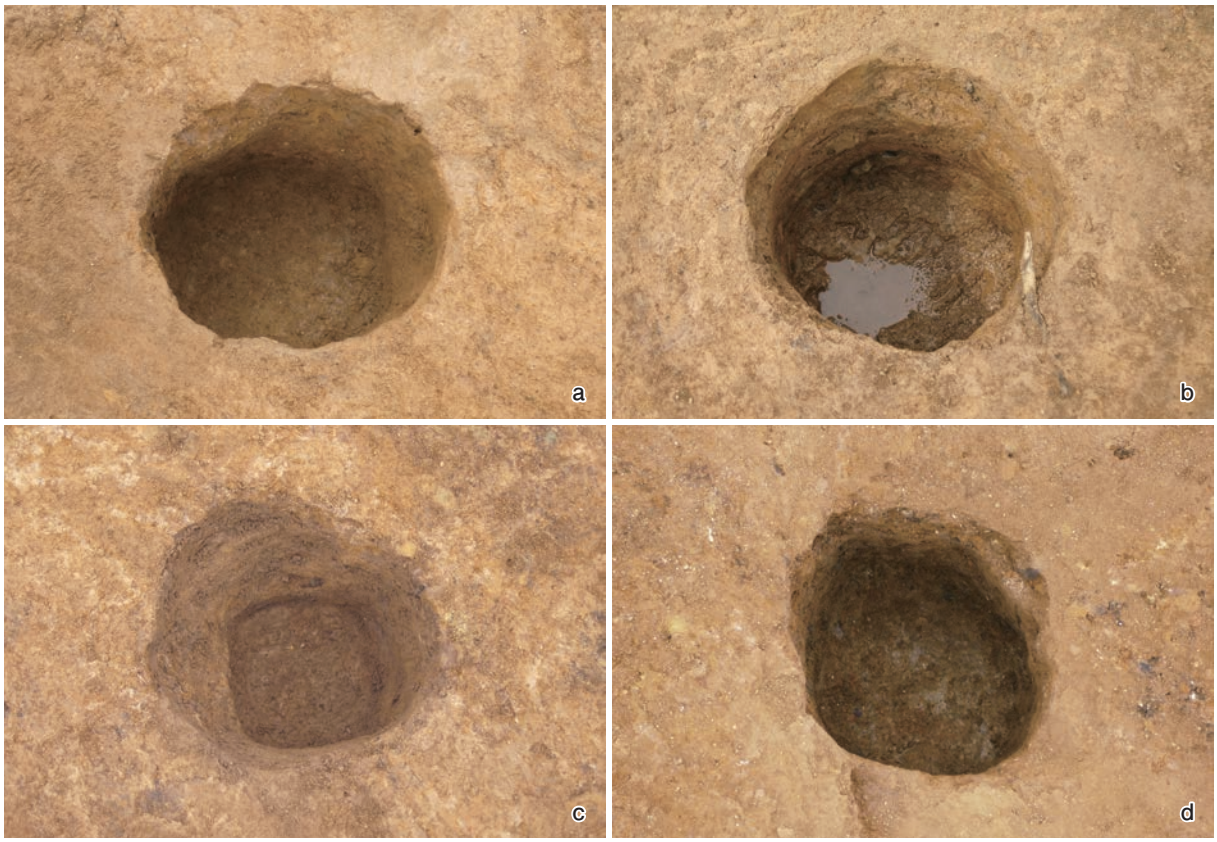
5　1号掘立柱建物跡全景（北から）

6　1号掘立柱建物跡全景（真上から）

7　１号掘立柱建物跡柱穴

a　Ｐ４断面（西から）
b　Ｐ６断面（西から）
c　Ｐ７断面（西から）
d　Ｐ13断面（東から）
e　Ｐ14断面（東から）
f　Ｐ18全景（東から）
g　Ｐ17遺物出土状況（東から）
h　Ｐ18遺物出土状況（南から）

8　２号掘立柱建物跡全景（東から）



9　２号掘立柱建物跡柱穴

a　Ｐ４全景（東から）　b　Ｐ５全景（東から）
c　Ｐ７全景（東から）　d　Ｐ８全景（東から）

10　１号土坑検出状況（東から）

11　１号土坑全景（西から）

12　１号土坑全景（南から）

13　１号土坑断面（南から）

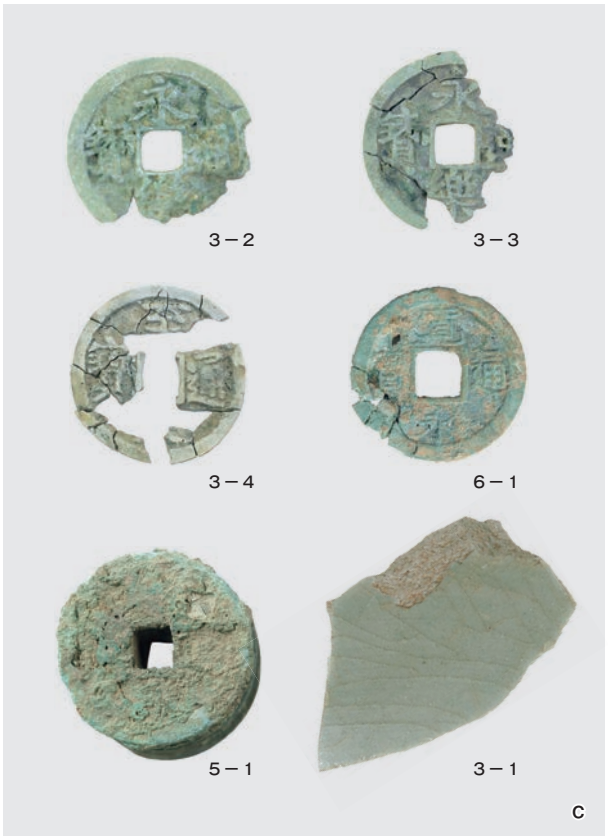
14　２～５号土坑

a　２号土坑全景（南から）　**b**　２号土坑断割（南から）
c　３号土坑全景（東から）　**d**　３号土坑断面（南から）
e　４号土坑全景（南東から）　**f**　４号土坑断面（南東から）
g　５号土坑全景（東から）　**h**　５号土坑断面（南から）

15　6～9号土坑

a　6号土坑全景（南西から）　**b**　6号土坑断面（南西から）
c　7号土坑全景（西から）　**d**　7号土坑断面（南から）
e　8号土坑全景（東から）　**f**　8号土坑断面（東から）
g　9号土坑全景（東から）　**h**　9号土坑断面（東から）

16　作業風景（東から）



17　調査状況と出土遺物

a　表土剥ぎ（南から）
b　作業風景（東から）　　c　出土遺物

写　真　図　版

第３編　上ノ台（かみのだい）遺跡

1　調査前状況（東から）

2　調査区全景（東から）

３　１号木炭窯跡検出状況（東から）

４　１号木炭窯跡全景（西から）

5　1号木炭窯跡細部

a　A－A′断面（東から）　**b**　B－B′断面（南から）
c　溝断面（東から）　**d**　木炭出土状況（西から）

6　1号木炭窯跡断割（東から）

7　1号遺物包含層

a　作業風景（東から）　b　断面（北から）

8　1号遺物包含層出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	いっぱんこくどう115ごうそうまふくしまどうろいせきはっくつちょうさほうこく５
書名	一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告５
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第514集
編著者名	菅原祥夫　菊田順幸　廣川紀子　由井文菜
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部 〒960-8115　福島県福島市山下町1-25　TEL024-534-2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688　福島県福島市杉妻町2-16　TEL024-521-1111
発行年月日	2016年10月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
福田（ふくだ）	福島県伊達市（ふくしまけんだてしりょう）霊山町下小国字福田（ぜんまちしもおぐにあざふくだ）・桜町（さくらまち）	07213	00655	37° 45′ 58″	140° 35′ 28″	20150629 ～ 20150828	1,100㎡	道路（一般国道115号相馬福島道路）建設に伴う記録保存調査
沼ヶ入（ぬまがいり）（１次調査）	福島県伊達市（ふくしまけんだてしりょう）霊山町下小国字沼ヶ入（ぜんまちしもおぐにあざぬまがいり）・御渡（みわたり）	07213	00656	37° 45′ 54″	140° 35′ 24″	20150727 ～ 20150930	1,300㎡	
上ノ台（かみのだい）	福島県伊達市（ふくしまけんだてしりょう）霊山町下小国字玉田（ぜんまちしもおぐにあざたまだ）	07213	00659	37° 46′ 15″	140° 35′ 13″	20151013 ～ 20151125	900㎡	

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福田	居住域	中世	土坑　４基 溝跡　２条	かわらけ	中世特有の方形竪穴状遺構に比定される土坑が検出され、15世紀のかわらけが出土した。
沼ヶ入（１次調査）	狩猟場 居住域 墓域	縄文時代 中世 近世	掘立柱建物跡２棟 土坑　９基	永楽通寶 至大通寶 青磁	地鎮跡を伴う15世紀の掘立柱建物跡の他、方形竪穴状遺構に比定される土坑が検出され、福田遺跡との関係が注目される。
上ノ台	遺物包含層 生産	縄文時代 中世以降	遺物包含層１ヵ所 木炭窯跡　１基	縄文土器 石器	縄文時代の遺物包含層、中世以降の木炭窯跡が検出された。

要約	福田遺跡と沼ヶ入遺跡は、中世室町期の一体的な城館関連遺跡と考えられる。上ノ台遺跡は、縄文時代に捨て場、中世以降に生産場として利用されていた。

※経緯度数値は世界測地系（平成14年４月１日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第514集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告５

福田（ふくだ）遺跡
沼ヶ入（ぬまがいり）遺跡（１次調査）
上ノ台（かみのだい）遺跡

平成28年10月28日発行

編　集　公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部（〒960-8115）福島県福島市山下町1-25
発　行　福島県教育委員会（〒960-8688）福島市杉妻町2-16
公益財団法人福島県文化振興財団（〒960-8116）福島市春日町5-54
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所（〒960-8584）福島市黒岩字榎平36
印　刷　不二印刷株式会社（〒963-8041）郡山市富田町字権現林26-61